

『河東記』訳注稿（八）

赤井益久 岡田充博 澤崎久和

二十九話 辛察（卷三百八十五・再生十二）

【全文】

大和四年十二月九日。邊上從事魏式暴卒於長安延福里沈氏私廟中。前二日之夕。勝業里有司門令史辛察者。忽患頭痛而絶。心上微暖。初見有黃衫人。就其牀。以手相就而出。既而返顧本身。則已殭矣。其妻兒等。方抱持號泣。嚙水灸灼。一家倉惶。察心甚惡之。而不覺隨黃衣吏去矣。至門外。黃衫人踟躕良久。謂察曰。君未合去。但致錢二千緡。便當相捨。察曰。某素貧。何由致此。黃衫曰。紙錢也。遂相與却入庭際。大呼其妻數聲。皆不應。黃衫晒曰。如此。不可也。乃指一家僮。教察以手扶其背。因令達語求錢。於是其家果取紙錢焚之。察見紙錢燒訖。皆化爲銅錢。黃衫乃次第抽拽積之。又謂察曰。一等爲惠。請兼致脚直送出城。察思度良久。忽悟其所居之西百餘步。有一力車傭載者。亦常往來。遂與黃衫俱詣其門。門卽閉關矣。察叩之。

車者出曰。夜已久。安得來耶。察曰。有客要相顧。載錢至延平門外。車曰諾。卽來。裝其錢訖。察將不行。黃衫又邀曰。請相送至城門。三人相引部領。歷城西街。抵長興西南而行。時落月輝輝。鐘鼓將動。黃衫曰。天方曙。不可往矣。當且止延福沈氏廟。逡巡至焉。其門亦閉。黃衫叩之。俄有一女人。可年五十餘。紫裙白襦。自出應門。黃衫謝曰。夫人幸勿怪。其後日當有公事。方來此廟中。今有少錢。未可遽提去。請借一隙處暫貯收之。後日公事了。卽當般取。女人許之。察與黃衫及車人。共般置其錢於廟西北角。又於戶外。見有葦席數領。遂取之覆。纔畢。天色方曉。黃衫辭謝而去。察與車者相隨歸。至家。見其身猶爲家人等抱持。灸療如故。不覺形神合而蘇。良久。思如夢非夢。乃曰。向者更何事。妻具言家童中惡。作君語。索六百張紙作錢。以焚之。皆如前事。察頗驚異。遽至車子家。車家見察曰。君來。正解夢耳。夜來所夢。不似尋常。分明自君家。別與黃衫人載一車子錢至延福沈氏廟。歷歷如在目前。察愈驚駭。復與車子偕往沈氏廟。二人素不至此。既而宛然昨宵行止。卽於廟西北角。見一兩片蘆蓆。其下紙

縉存焉。察與車夫。皆識夜來致錢之所。即訪女人。守門者曰。廟中但有魏侍御於此。無他人也。沈氏有臧獲。亦住廟旁。聞語其事。及形狀衣服。乃泣曰。我太夫人也。其夕五更。魏氏一家聞打門聲。使候之。即無所見。如是者三四。式意謂之盜。明日。宣言於縣胥。求備之。其日。式夜邀客爲煎餅。食訖而卒。察欲驗黃衫所言公事。嘗自於其側偵之。至是果然矣。出河東記

【原文】 1

大^①和四年十二月九日、邊上從事魏式^②、暴卒於長安延福里沈氏私廟中。前二日之夕、勝業里有司門令史辛察者、忽患頭痛而絶、心上微暖。初見有黃衫人、就其牀、以手相就而出。既而返顧本身、則已殭矣。其妻兒等、方抱持號泣、嚔水灸^③灼、一家倉惶。察心甚惡之、而不覺隨黃衣吏去矣。

【訓読】 1

大和四年の十二月九日、辺上從事魏式、暴かに長安延福里の沈氏の私廟中に卒す。前二日の夕、勝業里に司門令史辛察なる者有りて、忽ち頭痛を患ひて絶ゆるも、心上微かに暖かし。初め黄衫の人有りて、其の牀に就き、手を以て相ひ就きて出づるを見る。既にして本身を返顧すれば、則ち已に殭^{たふ}る。其の妻兒等、方に抱持して号泣し、水を嚔^ふき灸し灼きて、一家倉惶たり。察心に甚だ之を惡むも、覺えず黄衣の吏に随ひて去る。

【訳】 1

大和四年十二月九日、辺上従事の魏式が、長安延福里の沈氏の私廟において急死した。その二日前の夜、勝業里に住む司門令史の辛

察という者がにわかに頭痛を病んで息絶えたが、胸にわずかに温かみがあった。はじめ、黄色い上着の男が辛察の臥せっている床にやってくる、手を取って連れ出していった。ついで、辛察がわが身を振り返ると、もうすでに体は硬直していた。妻子らは辛察を抱きかかえて号泣し、水を吹きかけたり灸をすえたり、家中慌てふためいた。察は心中不快に感じたが、いつの間にか黄衣の役人について行ってしまった。

【校記】 1

① 「大」、会校本校記に「沈本作「太」とある。

② 「式」、会校本校記に「沈本作「武」とある。

③ 「灸」、談愷本・許本「炙」字に作り、黄本・四庫本「炙」に作る。「灸」は『龍龕手鑑』に見え、「之石反、燎也。説文從肉在火上」とある。この音と義であれば「炙」字に当たる。段玉裁『説文解字注』「炙」に、「小徐本火部有炙、云炙也。從火夕聲」とあり、これに続けて「蓋唐以前或用𩇑入許書（蓋し唐以前、或は用て許書に𩇑^{まじ}り入るならん）」という。本話の「嚔水灸灼」は辛察を家族が介抱している場面であるから、「灸」がよい。

【注】 1

○大和四年 西暦八三〇年。「大和」は唐・文宗（在位八二六―八四〇年）の年号。『河東記』には本話以外に03「慈恩塔院女仙」等の八話に大和（太和を含む）の年号が用いられる。

○邊上従事 辺塞地勤務の補佐官、幕僚。「邊上」は辺塞。「塞上」

も同じ。「從事」は唐代では主に地方官の幕僚の称。『太平広記』巻二〇二・憐才「韓愈」に「李賀字長吉、唐諸王孫也。父璿肅、邊上從事(李賀、字は長吉、唐の諸王孫なり。父璿肅は、辺上從事たり)」「(出典は五代・王定保『唐摭言』)。また、『全唐詩』に周繇「送邊上從事」(卷六三五)、鄭谷「寄邊上從事」(卷六七四)などの作がある。「從事」については、『河東記』では28「崔紹」、32「盧從事」にも見える。本訳注稿、32「盧從事」【注】1「從事」の項参照。

○魏式 魏式の名は『太平広記』に本話にのみ見える。『文苑英華』卷一〇一・賦・工芸に「工先利器賦」と題する賦の作者として名がみえるが、本話の魏式との関係は不明。『全唐文』卷九五七所収。

○暴卒 突然死ぬ。「暴死」に同じ。『太平広記』には「暴卒」した人の話が少なくなく、そこから物語が始まることも多い。『河東記』では27「許琛」に「二更後暴卒、至五更又蘇(二更の後暴かに卒し、五更に至りて又蘇る)」、また18「鄭馴」には「其夜、暴病霍亂而卒(其の夜、暴かに霍亂を病みて卒す)」。

○延福里 長安城の中央より南西に位置する坊。朱雀門街西第三街、北より第九坊。『太平広記』には他に一例、卷三七〇・精怪三・雜器用「崔穀」に「元和中、博陵崔穀者、自汝鄭來、僑居長安延福里(元和中、博陵の崔穀なる者、汝鄭自り来たりて、長安の延福里に僑居す)」(出典は唐・張讀『宣室志』)。唐・杜牧「上宰相求湖州第二啓」に「奔走困苦無所容、歸死於延福私廟(奔走困苦して容るる所無く、延福の私廟に帰り死す)」(『全唐文』卷七五三、『樊川文集』卷一六)。

○沈氏私廟 沈氏一族の祖先を祭る廟、家廟。「私廟」は『太平広記』にはいま一例、卷二七五・童僕奴婢附「上清」に「某盤所有、堂封絹千匹而已、方擬修私廟次、今日輒贈可矣(某有る所を盤すも、堂封の絹千匹のみ、方に私廟を修せんと擬する次で、今日輒ち贈る可なり)」(出典は唐・陳翰『異聞集』)。私廟については、唐・杜佑『通典』卷四八・礼八「諸侯大夫士宗廟」に「天寶十年正月赦文、……其京官正員四品清望官、及四品五品清官、竝許立私廟(天寶十年正月赦文、……其の京官の正員四品の清望官、及び四品五品の清官、並に私廟を立つるを許す)。中唐・王起(七六〇～八四七)「請禁皇城南六坊内朱雀門至明德門夾街兩面坊及曲江側近不得置私廟奏」(『全唐文』卷六四三)、李德裕(七八七～八五〇)「奉宣今日以後百官不得於京城置廟狀」(『全唐文』卷七〇六)、晚唐・令狐綯「請申禁天門街左右置私廟竝按品定廟室數奏」(『全唐文』卷七五九)などの文により、私廟の建立がたびたび問題となっていたことがうかがえる。北宋・王溥『唐會要』卷一九・百官家廟に私廟に関する歴代の資料を挙げ、私廟の建立には当人の品階やその場所、廟の数などに規定があったことが知られる。なお、清・徐松『唐兩京城坊攷』卷四「次南延福坊」に「沈氏私廟」をあげ、その注に「河東記」から本話を節録する。『唐代長安詞典』(張永祿主編、陝西人民出版社、二〇一一年第2版)「百官家廟」に二十五の家廟を列挙し、その中の一つに「沈氏家廟」(六四頁)を挙げるのも「河東記」による。

○勝業里 長安朱雀門街東第四街、北より第四坊。東市の北、興慶宮の西に位置する。清・程鴻詔『唐兩京城坊考補記』「勝業里」に「司

門令史辛察宅（注、河東記）車傭宅（注、河東記在辛察宅居之西百餘宅）」とある。『太平広記』では卷四八七・雜伝記四「霍小玉傳」に「住在勝業坊古寺曲、甫上車門宅是也（住ひは勝業坊の古寺曲に在り、甫^はめての上車門の宅是れなり）」（『霍小玉傳』は唐・蔣防作）。○**司門令史辛察者** 「司門」は都城の門・橋・道等を司る官職。「令史」は文書事務官。『太平広記』にはいま一例、卷二六八・酷暴二「李全交」に「司門令史張性」なる人物が見える（出典は唐・張鷟『朝野僉載』）。辛察の名は『太平広記』に本話以外には見えず、両『唐書』にも見えない。

○**心上微暖** 胸にわずかに温かみがある。急死した者が蘇生する話にしばしば用いられる表現。『太平広記』では卷一〇二・報応一・金剛經「趙文昌」に「隋開皇十一年、大府寺丞趙文昌忽暴卒。唯心上微煖、家人不敢斂、後復活（隋の開皇十一年、大府寺丞趙文昌忽ち暴かに卒す。唯心上のみ微かに煖かければ、家人敢へて斂めず、後に復び活く）」（出典は唐・釈道世『法苑珠林』、卷一〇三・報応二・金剛經「李岡」に「唐兵部尚書李岡得疾暴卒。唯心上煖、三日復蘇（唐の兵部尚書李岡疾を得て暴かに卒す。唯心上のみ煖かく、三日にして復び蘇る）」（出典は唐・盧求『報応記（金剛經報応記）』）。『河東記』では28「崔紹」に「死已七日矣。唯心及口鼻微暖。蘇後一日許……（死して已に七日。唯心及び口鼻のみ微かに暖かし。蘇りて後一日許り……）」。

○**初見……** 「初」は、何かを語り出す際、時間をさかのぼって述べるときに言う語。まず初めに、当初。『太平広記』には卷一五・

神仙一五「阮基」に「三日而活、久能言、言云、初見黃衣使者二人、執文書、引基去（三日にして活き、久しくして能く言ふ、言ひて云はく、「初め黄衣の使者二人の、文書を執りて、基を引き去くを見る」と）」（出典は前蜀・杜光庭『神仙感遇伝』）とあるなど、散見する。『河東記』では27「許琛」に「謂其儕曰、初見二人黄衫、急呼出使院門、因被領去（其の儕に謂ひて曰く、「初め二人の黄衫の、急ぎ呼びて使院門を出で、因りて領せられて去くを見る」と）」。

○**黄衫人** 黄色い短い服を着た人物。黄衫はしばしば冥界・異界からの使者の服装。『河東記』では02「蕭洞玄」に「既而有黄衫人。領二手力至（既にして黄衫の人あり。二手力を領して至り）」とある他、07「李敏求」、27「許琛」にも登場する。

○**本身** 元のからだ。現世における元の生身の身体。『太平広記』に散見する。『河東記』では15「馬朝」と28「崔紹」に見える。このうち「崔紹」には「却廻至雷州客館、見本身偃臥於牀、以被蒙覆手足。天王曰、此則公身也。但徐徐入之。莫懼。如天王言、入本身便活（却廻して雷州の客館に至るに、本身の牀に偃臥し、被蒙を以て手足を覆ふを見る。天王曰く、「此れ則ち公の身なり。但だ徐徐に之に入れ。懼ること莫れ」と。天王の言の如くするに、本身に入りて便ち活く）」とあり、「本身」から抜け出ていた崔紹がふたたび「本身」に入って生き返る様子が描かれる。

○**抱持號泣** 抱きかかえて号泣する。南朝・齊梁・任昉「王文憲集序」（『文選』卷四六）「汝郁之幼挺淳至（汝郁の幼にして淳至を挺す）」の李善注に「東觀漢記曰、汝郁、字幼異、陳國人。年五歳、母被病、

不能飲食。郁常抱持啼泣、亦不肯飲食（東觀漢記に曰く、汝郁、字は幼異、陳國の人。年五歳にして、母病を被り、飲食するあたはず。郁常に抱持して啼泣し、亦た飲食するを肯ぜず）。『太平広記』巻四三六・畜獸三・驢「王甲」に「於是兄妹抱持慟哭、驢亦涕泣皆流（是に於いて兄妹抱持して慟哭し、驢も亦た涕泣皆流る）」（出典は唐・釈道世『法苑珠林』。別に『法苑珠林』巻九六・捨身篇第九六・引証部第二に「時王即前、抱持二子、悲號涕泣、隨路還宮（時に王即ち前み、二子を抱持して、悲号涕泣し、路に随ひて宮に還る）」。『河東記』では「抱持」は07「李敏求」に、「號泣」は28「崔紹」に見える。

○嚔水 「嚔」は、口に含んだ水などを噴き出す。さまざまな呪術に用いられるが、ここでは病を治す行為。『太平広記』では巻六〇・女仙五「樊夫人」に「逍遙如寐醒、方起、將欲拜、忽遺左足、如刖於地。媼遽令無動、拾足勘膝、嚔之以水、乃如故（逍遙寐り醒めたるが如く、方めて起きて、將に拝せんと欲するも、忽ち左足を遺ひ、地に刖るが如し。媼遽かに動くこと無からしめ、足を拾ひて膝を勘へ、之に嚔くに水を以てするに、乃ち故の如し）」（出典は唐・裴鉞『伝奇』）とあり、動かなくなった足に水を「嚔」してこれを治している。他にも巻五五・神仙五五「伊用昌」に「熊嘗於頂上患一癰癤、疼痛不可忍。伊尊師含三口水、嚔其癰便潰、竝不爲患（熊嘗て頂上に於いて一癰癤を患ひ、疼痛忍ぶべからず。伊尊師三口の水を含み、其の癰に嚔けば便ち潰る、並びに患を為さず）」（出典は五代・王仁裕『玉堂閑話』）と、巻八一・異人一「幸靈」に「有

龔仲儒女、病積年、氣息纔屬。靈以水嚔之、應時大愈（龔仲儒の女有り、病むこと積年、氣息纔かに属す。靈水を以て之に嚔けば、時に応じて大いに愈ゆ）」（出典は劉宋・雷次宗『豫章記』）。なお、「嚔水」は『河東記』では10「板橋三娘子」に、器の中から取り出した木牛や人形に向かって「含水嚔之（水を含みて之に嚔く）」やそれらが生きて動き出したとあるのが知られる。これとは逆に、妖異に化した者を元の器物に戻す際に用いられる例としては、『太平広記』巻三七二・精怪五・凶器下「張不疑」に春条という名の青衣に対して「復作法禹歩、又以水向門而噴者三（復た法を作して禹歩し、又た水を以て門に向かって噴すること三たび）」したところ、春条は硬直して地に倒れ、「視之、一朽盟器、背上題曰春條（之を視るに、一の朽ちし盟器にして、背上に題して春条と曰ふ）」とある（出典は唐・鄭還古『博異志』）。これらは、「嚔水」が人や器物に命を吹き込んだり奪ったりする例と言えよう。なお、本話では「嚔水」を行っているのは道士ではなく家族なので必ずしも呪術を行っているとは言えないが、「灸灼」とともに、辛察の蘇生を試みる行為であることに変わりはない。

○灸灼 灸をすえる。「灼」は焼く。後文に「至家、見其身猶爲家人等抱持、灸療如故（家に至り、其の身を見るに猶ほ家人等に抱持せられ、灸療さること故の如し）」とある。

○一家倉惶 家中のものが慌てふためく。「一家」は家中の者。『河東記』では11「盧佩」に「於是一家歡躍、競持所有金帛、以遺婦人（是に於いて一家歡躍し、競ひて有する所の金帛を持し、以て夫人

に遺る)。「倉惶」は危急に際して慌てふためく意。疊韻の語。「蒼惶」も同じ。

○心甚惡之 心中、きわめて不快に思う。不吉なものを目にしたときの表現。『太平広記』には「心甚惡之」ないし「意甚惡之」という表現が散見する。『河東記』では11「盧佩」に墓地で不可解な行動とる妻を目にした盧佩について「佩心甚惡之(佩心に甚だ之を惡む)」とある。

【原文】 2

至門外、黄衫人踟躕良久、謂察曰、君未合去、但致^①錢二千緡、便當相捨。察曰、某素貧、何由致此。黄衫曰、紙錢也。遂相與却入庭際、大呼其妻數聲、皆不應。黄衫晒^②曰、如此、不可也。乃指一家僮^③、教察以手扶其背、因令達語求錢。於是其家果取紙錢焚之。察見紙錢燒訖、皆化爲銅錢。黄衫乃^④次第抽拽積之。又謂察曰、一^⑤等爲惠。請兼致脚直送出城。察思度良久、忽悟其所居之西百餘步、有一力車傭載者、亦常往來、遂與黄衫俱詣其門。門即閉關^⑥矣。察叩之、車者出曰、夜已久、安得來耶。察曰、有客要相顧、載錢至延平門外。車曰^⑦、諾。即來。

【訓読】 2

門外に至り、黄衫の人踟躕すること良や久しうし、察に謂ひて曰く、「君未だ合に去くべからず。但だ錢二千緡を致さば、便ち当に相ひ捨すべし」と。察曰く、「某素より貧なれば、何に由りてか此れを致さん」と。黄衫曰く、「紙錢なり」と。遂に相ひ与に却って

庭際に入り、大いに其の妻を呼ぶこと数声、皆な応へず。黄衫晒ひて曰く、「此の如きは、可ならず」と。乃ち一家僮を指さし、察をして手を以て其の背を扶け、因って語を達して錢を求めしむ。是に於いて其の家果して紙錢を取って之を焚く。察紙錢の焼き訖へしを見るに、皆化して銅錢と爲る。黄衫乃ち次第に抽拽して之を積む。又察に謂ひて曰く、「一等惠を爲せり。請ふ兼ねて脚を致して直ちに送りて城より出んことを」と。察思度すること良や久しうするに、忽ち其の居る所の西百余歩に、一力車の傭載せる者有りて、亦た常に往來するを悟り、遂に黄衫と俱に其の門に詣る。門即ち関を閉ざす。察之を叩くに、車の者出て曰く、「夜已に久しきに、安くんぞ来るを得んや」と。察曰く、「客有りて相ひ顧み、錢を載みて延平門外に至らんことを要む」と。車曰く、「諾」と。即ち来る。

【訳】 2

門の外に着くと、黄衫の男はしばらくためらっていたが、辛察に、「あなたはまだあの世に行くことはない。錢二千緡を出しさえすれば、すぐに釈放しよう」と言った。辛察は、「わたしはもとより貧乏です。いったいどうすればいいのですか」と答えた。男は、「紙錢だよ」と言う。そこでいっしょに引き返して中庭に入り、大声で何度も妻を呼んでみたが、だれも答えなかった。黄衫の男は笑って、「そんなやり方ではだめだ」と言う。一人の召使を指さして、辛察に手でその背中を支えさせ、召使の口から紙錢を求めるように言わせた。するとはたして辛察の家では紙錢を手に入れて焼いてくれた。紙錢は燃え尽きるや、みな銅錢に変化した。男はそこで次々と

銅銭を取り出して積み上げ、また辛察に「ご厚意ついにて、車を雇ってすぐに城外に運び出してもらえないだろうか」と言った。辛察はしばらく考えていたが、ふとわが家の西、百歩余りのところに日頃行き来している荷物運びの車夫がいることを思い出し、そこで黄杉の男といっしょにその家の門口を訪ねた。門は閉まっていたが、辛察が戸を叩くと車夫が出てきて、「すっかり夜もふけたというのに、どうしてまたお越しになられたので」と言う。辛察が、「お客さんが見えて、お前をやとって銭を積んで延平門の外まで行ってもらいたいとおっしゃるんだ」と言うと、車夫は「承知しました」と言い、すぐに（辛察の家に）やってきた。

【校記】 2

- ① 「致」、会校本校記に「沈本作「置」とある。
- ② 「晒」、会校本校記に「沈本作「乃」とある。
- ③ 「僮」、会校本校記に「孫本作「童」とある。
- ④ 「乃」、黄本・四庫本「及」に作る。
- ⑤ 「一」、会校本は本文「某」に作り、校記に「原作「一」。現據沈本改」という。伝奇輯校本の校記に、会校本が本文を「某」に改めるのを誤りとし、その按語に、「黄杉人只一人而已、不得言某等。一等、一併。一等爲惠、言好事做到底也」という。「一」のままとする。
- ⑥ 「閉關」、会校本「關閉」に作り、校記に「關閉 原作「閉關」。現據孫本改」という。伝奇輯校本は本文「閉關」のままとし、その按語に「閉關即關閉。關、門門。『劇談錄』卷上「李朱崖知白令公」、「曩時登第貧交、今日閉關不接」という。

⑦ 「車曰」、筆記本「車者」に作る。

【注】 2

○ 踟躕 ためらって進まないようす。双声の語。

○ 錢二千緡 緡は銭を通すひも。銅銭一千枚をひもで通したものを一緡とした。一緡は千文。一貫に同じ。後文にこの銭を燃やして銅銭に換え、車に積み込んで運搬する場面があることから知られるように、二千緡は相当の分量となる。『河東記』では06「呂群」に下僕を「二十緡」で贖う場面が登場する。『河東記』訳注稿(六)（『名古屋大学中国語学文学論集』第三二輯）第六話「呂群」の【参考】「下僕の値段」参照。

○ 便當相捨 すぐに許すであろう。「捨」は釈放する意。『太平広記』では卷二三〇・器玩二「王度」に「公適有美言、尚許相捨（公適たま美言有りて、尚ほ相ひ捨さんことを許せり）」（出典は唐・陳翰『異聞集』）。

○ 素貧 もともとからの貧乏。『太平広記』では卷四八七・雜伝記四「霍小玉傳」に「生家素貧、事須求貸（生の家は素より貧にして、事須らく求貸すべし）」（「霍小玉傳」は唐・蔣防作）。

○ 紙錢 葬送の時に死者とともに墓に埋めたり、祭祀の時に燃やしたりする、紙で作られた銭。後文に「皆化して銅銭と爲る」とあるように、死者や鬼神のあの世での用に供する。紙銭は『河東記』に散見する。11「盧佩」（『河東記』訳注稿(五)「一二七頁、『名古屋大学中国語学文学論集』第三二輯」、14「王錡」（「同(三)」二四八頁、同第二九輯）、16「韓弇」（「同(五)」一一八頁、同第

三一輯）参照。

○家僮 召使い。「家童」とも表記し、『太平広記』に頻出する。家事や買い物、馬の世話などの様々な用をこなし、手紙を届けたり、主人のお供をしたり、その技能によっては歌舞なども担当した。韻文では六朝までの詩にはほとんど見えないが、唐詩には散見する。『河東記』では28「崔紹」に「紹甚惡之、因命家童、繫三猫於筐篋、加之以石（紹甚だ之を惡み、因りて家童に命じて、三猫を筐篋に繫ぎ、之に加ふるに石を以てす）」。

○教察以手扶其背 この句、家族の者には姿の見えない辛察が家僮の背中を手で支えてこれを操り、家僮に辛察の声色で語らせる場面と解される。前野直彬訳『唐代伝奇集2』（平凡社東洋文庫、一九六四年）「冥途の使者」では「その背中を察に手でなでさせて」（二〇三頁）と訳する。

○次第 次々に。たちまちに。張相著『詩詞曲語辭匯釈』「次第（二）」に「次第、進展之辭、猶云接着也。轉眼也」と釈する。『太平広記』では卷一一・報応一〇・觀音經「徐善才」に「及還家、道逢胡賊。賊所掠漢人千百、將向洪崖、次第殺之（家に還るに及び、道に胡賊に逢ふ。賊掠する所の漢人千百、將に洪崖に向いて、次第に之を殺す）」（出典は唐・釈道世『法苑珠林』）。

○抽拽積之 燃やした紙銭の中から銅銭を取り出して積み上げる。「抽拽」は引く張って取り出す意であろう。『太平広記』等に用例を見ない。後世の資料であるが、明・高濂『遵生八牋』卷一三・飲饌服食牋下卷・甜食類「水滑麵法」に水につけておいた麵について、「逐

塊抽拽下湯煑熟。抽拽得潤薄乃好（塊を逐ひて抽拽し湯に下して煮熟す。抽拽して潤薄を得れば乃ち好し）」とある。

○一等爲惠 同じくご厚意により、ご厚意にあずかったついでに……。『二等』は、おなじく、すべて。「爲惠」は、よい贈り物とする。この四字、解しにくいのが、【校記】2—⑤に記したように、李劍国氏が「一等、一併。一等爲惠、言好事做到底也」というのに従い、面倒見るなら最後まで、の意に解した。ここでは、紙銭を燃やすというご厚意にあずかったついでに、といった意味。すでに前出前野訳『唐代伝奇集2』に「お恵みにあずかったついでに、……」（二〇三頁）、天津古籍出版社『文白対照全訳『太平広記』』に「求你作好事做到底、……」（一三五頁）、河北教育出版社『白話太平広記』に「反正您已经施了一次恩惠、……」（三八四五頁）と訳されている。なお、『二等』は張相著『詩詞曲語辭匯釈』「一等（一）」に「猶云等是或一樣也」とあり、江藍生・曹広順編著『唐五代語言詞典』（上海教育出版社）「一等」の条に『河東記』から本話を引き、「同様、全」とする。「爲惠」は『太平広記』卷二六・神仙二六「葉法善」に、婆羅門の幻法から救ってもらった龍が葉法善にお礼に宝物を贈ろうとしたところ、「但致一清泉、即爲惠也（但だ一清泉を致せば、即ち恵と為さん）」（もし清らかな水路を通じてくれたならば、それが何よりの贈り物です）と答える場面がある（出典は唐・薛用弱『集異記』及び前蜀・杜光庭『仙伝拾遺』）。また、同卷三一・神二四「司馬正彝」に「婦人云、至都、有好粉臙脂、宜以爲惠（婦人云ふ、都に至りて、好き粉の臙脂有らば、宜しく以て恵みと為すべし）」と

(出典は南唐・徐鉉『稽神録』)。

○致脚 車夫を雇う、車をたのむ。「致」は招致する。「脚」は荷物
の運搬人。脚夫。『太平広記』に「致脚」の用例は他に見えないが、
卷四・五三・狐七「李令緒」に「令緒驚云、行李貧迫、要致車乘、計
無所出(令緒驚きて云ふ、「行李貧迫して、車乗を致さんと要する
も、計の出す所無し」と)」(出典は唐・闕名『騰聽異志録』。「車乗」
はくるま)。

○思度 思案する。『旧唐書』卷一六・穆宗本紀に「朕再三思度、
終所未安(朕再三思度するも、終に未だ安んぜざる所あり)」。

○力車 荷車。『宋史』卷一九一・郷兵に、「造乾糧炒飯布囊力車、
以備餽運(乾糧・炒飯・布囊・力車を造り、以て餽運に備ふ)」。『餽
運』は食糧を運搬する。唐代では、『西陽雜俎』前集卷一六・広動
植之一・羽篇「鬼車鳥」に「秦中天陰、有時有聲、聲如力車鳴、或
言是水雞過也(秦中天陰り、時有りて声有り、声力車の鳴るが如し、
或は言ふ是れ水鶏の過るなりと)」。

○延平門 長安城の西の三門のうちもっとも南の門。延福里の北側
の道を真西に行けば、延平門に行き着く。

【原文】 3

装其錢訖、察將不行。黄衫又邀曰、請相送至城門。三人相^①引部領、
歷城西街、抵長興西南而行。時落月輝輝、鐘^②鼓將動。黄衫曰、天
方曙。不可往^③矣。當且止延福沈氏廟。遂巡至焉、其門亦^④閉。黄
衫叩之、俄有一女人、可年五十餘、紫裙白襦、自出應門。黄衫謝曰、

夫人幸勿怪。其^⑤後日當有公事、方來此廟中。今有少錢、未^⑥可遽
提去。請借一隙處暫^⑦貯收之。後日公事了、即當般^⑧取^⑨。女人許之。
察與黄衫及車人、共般^⑩置其錢於廟西北角。又於戶外、見有葦席數領、
遂取之覆。纔畢、天色方曉。黄衫辭謝而去。察與車者相隨歸。

【訓読】 3

其の錢を装し訖はり、察將に行かざらんとするに、黄衫又た邀
きて曰く、「請ふ相ひ送りて城門に至らんことを」と。三人相ひ引
きて部領し、城西の街を歴んとして、長興に抵りて西南して行く。
時に落月輝輝として、鐘鼓將に動かんとす。黄衫曰く、「天方に曙
けんとす。往くべからず。当に且く延福の沈氏の廟に止まるべし」と。
遂巡にして至るに、其の門も亦た閉ざさる。黄衫之を叩くに、俄
かに一女人の年五十余ばかりなる有り。紫裙白襦にして、自ら出で
て門に応ず。黄衫謝して曰く、「夫人幸ひに怪しむこと勿れ。其の
後日当に公事有るべければ、方に此の廟中に来たらん。今少錢有
りて、未だ遽かには提去すべからず。請ふ一隙處を借りて暫らく貯
へて之を収めん。後日公事了らば、即ち当に般取すべし」と。女人
之を許す。察と黄衫及び車人、共に般して其の錢を廟の西北の角に
置く。又戶外に於いて、葦席數領有るを見、遂に之を取りて覆ふ。
纔かに畢るに、天色方に曉けんとす。黄衫辭謝して去り、察と車者
相ひ隨ひて歸る。

【訳】 3

錢を積み終わり、辛察は自分はどう行くまいと思っていたが、黄
衫の男はまた辛察を招いて、「どうか城門まで行ってはくれまいか」

と言う。そこで三人は連れ立って車を引き、街西を通って行こうと、長興坊に着くと西南を目指して行った。ときに落月は皓々と輝き、鐘鼓の音も鳴り響こうという時刻、黄衫の男は、「もうすぐ夜明けだ。これ以上は行けない。しばらく延福里の沈氏の廟に留まることにしよう」と言った。ほどなくして到着したが、廟の門は閉まっていた。黄衫の男が門を叩くと、すぐに一人の女があらわれた。年のころは五十余り。紫のスカートに白の上着という姿で、自ら出てくると門を開けた。黄衫の男はわびてこう言った。「ご夫人、どうか怪しまないでいただきたい。明後日、公務があるのでかならずこの廟にまいります。いまいくらかの錢があるのですが、すぐには運び出すことができません。どうか空いたところをお借りして、しばらくのあいだこれを置かせていただきたい。明後日、公務が終わったならば、かならずすぐに運び出します。」女は承知した。辛察と黄衫の男と車夫は、一緒に車に積んであった錢を廟の西北の隅に置いた。また、戸外にアシで編んだむしろが数枚あるのを見つけ、これで錢をおおった。ようやく終えると、ちょうど夜も明けようとしていた。黄衫の男は礼を述べて去り、辛察と車夫もつれだって帰っていった。

【校記】 3

① 「相」、会校本「招」に作り、校記に「原作「相」。現據孫本改」という。

② 「鐘」、談愷本・黄本「鍾」に作る。

③ 「往矣」、四庫本「行矣」に作る。会校本校記に「矣 沈本作「來」

とある。

④ 「亦」、筆記本「已」に作る。

⑤ 「其」、会校本「某」に作り、「原作「其」。現據沈本改」という。伝奇輯校本また明鈔本によるとして「某」に作る。

⑥ 「未」、会校本校記に「孫本作「來」とある。

⑦ 「暫」、会校本校記に「孫本作「轉」とある。

⑧ 「般」、四庫本・会校本「搬」に作る。会校本校記に「原作「般」。現據沈本改。下同」と、伝奇輯校本校記に「般 明鈔本・『四庫本・『太平廣記鈔』卷六一作「搬」、下同、『會校』據明鈔本改。按、般、同「搬」という。

⑨ 「取」、会校本校記に「取 孫本作「此」とある。

⑩ 「般」、四庫本・会校本「搬」に作る。

【注】 3

○部領 続べ率いる。『河東記』では09「胡媚兒」に「部領車乗、趨東平而去（車乗を部領し、東平に趨り去る）。』『河東記』訳注稿（四）」【注】 2「部領」参照（『名古屋大学中国語学文学論集』第三〇輯、二六三頁）。

○歴城西街 「城西街」は長安城の西の街、つまり「街西」（『旧唐書』卷三八・地理志に「街西五十四坊、長安縣領之」）の意と解される。ところが、これに続く「抵長興西南而行」の「長興」は「長興坊」であろうから、これは街東に位置しており、街西を経てのち長興に到るとするならば地理的に不自然である。前野訳『唐代伝奇集2』は「西市を通過して長興里の西南まで来たときには」（一〇四

頁」と訳すが、辛察のとった経路としては無理がある。河北教育出版社『白話太平広記』三八四頁が「他們經過城西街、奔長安西南而去」とするのは「長興」を「長安」に改めて、この矛盾を解消しようとするものである（延福坊は長安城の西南に位置する）。しかし、「長興」に文字の異同は無く、またこれを「長安」の意に取るのは無理であろう。いま、本文は底本通りとし、「城西の街を歴んとし」と読んでおく。「城西街」の「西」字についてはつとに徐松『唐兩京城坊攷』卷四「次南延福坊」の「沈氏家廟」の按語に「按城西街西字疑誤（按ずるに「城西街」の「西」字疑ふらくは誤りならん）」とある。

○**抵長興西南而行** 「長興」は長興坊。長安城の朱雀門街東第二街、北より第四坊。勝業坊の辛察宅から、後出の延福坊の沈氏私廟に至る途中にあたる。この句、「長興の西南に抵りて行く」とも読めるが、延平門に到る経路として長興坊の西南という一角を特に指示する理由が見当たらない。北京燕山出版社『白話太平広記』九七五頁に「經過城西街、到長興里再往西南走」と訳するのに従う。

○**落月輝輝** 沈みゆく月が光り輝く。夜があける前の情景。「輝輝」は光り輝くさま。唐・韓愈「東方半明」に「殘月輝輝、太白睽睽。雞三號、更五點（殘月輝輝たり、太白睽睽たり。鶏は三號し、更は五点）」（『全唐詩』卷三三八）。

○**鐘鼓將動** 都城の開門を告げる太鼓が鳴り出す。ここでは冥界の者の活動時間が終わることを示す。唐詩では、劉復の「春雨」に「曉聽鐘鼓動、早送錦障泥（曉に聴く鐘鼓の動くを、早に送る錦障の泥）」

（『全唐詩』卷三〇五）、韋莊の「喜遷鶯」に「街鼓動、禁城開（街鼓動き、禁城開く）」（『花間集』卷二）。

○**逡巡** たちまちに。『河東記』では28「崔紹」に「逡巡、遙見一城門（逡巡にして、遙かに一城門を見る）」。

○**紫裙白襦** 紫色のスカートと白い短めの上着。「紫裙」も「白襦」も『太平広記』には本話以外には見えず、六朝・唐詩にも見えない。『新唐書』卷二四・車服志「皇太子之服六」に乘馬の服として、「紫裙・白袴」、「白袴・襦」などが見える。

○**幸勿……** どうか……しないでください。「幸」は願う意。『太平広記』卷二九八・神八「柳智感」に「感曰、夫人幸勿相牽、可無逼迫之慮。婦人許之（感曰く、「夫人幸ひに相ひ牽くこと勿れ、逼迫の慮れ無かるべし」と。婦人之を許す）」（出典は唐・唐臨『冥報録（冥報記）』。「婦人許之」という一文は本話の後文にも見えている。

○**後日** 明後日。「後日」には後日（ごじつ）の意味もあるが、本話の冒頭に「前二日之夕」とあり、また後文の展開においても魏式が亡くなるのは二日後の出来事であるから、ここでの「後日」は明後日を意味する。『太平広記』卷一〇六・報応五・金剛經「宋衍」に「衍感泣請歸。姥指東南一徑曰、但尋此去。校二百里、可以後日到家也。與米二升。拜謝遂發、果二日達河陰（衍感泣して帰らんことを請ふ。姥東南の一徑を指さして曰く、「但だ此れを尋ねて去け。校ふること二百里にして、後日を以て家に到るべし」と。米二升を与ふ。拝謝して遂に発するに、果して二日にして河陰に達す）」（出典は唐・盧求『報応記（金剛經報応記）』）。

○公事 公の役目、仕事。ここでは、寿命の尽きた者をあの世に連れて行く役目。『河東記』では07「李敏求」に「假使公在世間作官職、豈可將他公事、從其私欲乎（假^も使し公世間に在りて官職と作れ^なば、豈に他の公事を將て、其の私欲に従はしむるべけんや）」と、28「崔紹」に「大王曰、公事已畢。即還生路。存歿殊途（大王曰く、「公事已に畢れり。即ち生路に還さん。存没は途を殊にす」と）」。

○少錢 いくばくかの錢。『太平広記』卷一二・報応一一・崇経像「張御史」に鬼が張御史に延命のために紙錢を請う場面があり、紙錢の額についてやりとりして、「（鬼）願乞少錢。某云、我貧士、且在逆旅、多恐不辦。鬼云、唯二百千。某云、若是紙錢、當奉五百貫。鬼云、感君厚意（鬼）「願はくは少錢を乞はん」と。某云ふ、「我は貧士にして、且つ逆旅に在れば、多^{まさ}に弁ぜざるを恐る」と。鬼云ふ、「唯だ二百千のみ」と。某云ふ、「若し是れ紙錢なれば、当に五百貫を奉ずべし」と。鬼云ふ、「君が厚意に感ず」と」（出典は唐・戴孚『広異記』）とあり、「少錢」と言っても紙錢の場合は相当の額であることが分かる。

○提去 取り出して持ち去る。『太平広記』ではいま一例、卷四四・畜獸一一・猿上「歐陽紇」に「婦人三十輩、皆絶其色。久者至十年、云色衰必被提去、莫知所置（婦人三十輩、皆其の色を絶す。久しき者は十年に至り、色衰へなば必ず提去せられて、置く所を知る莫しと云ふ）」（出典は底本に「續江氏傳」とある。唐・闕名「補江総白猿伝」のこと）。

○隙處 すき間。ものかげ。『太平広記』にはいま一例、卷

三四三・鬼二八「李和子」に「呼曰、爾非李努眼子名和子乎。和子即揖之。又曰、有故、可隙處言也。因行數歩、止於人外、言冥司追公。可即去（呼びて曰く、「爾は李努眼の子にして名は和子に非ずや」と。和子即ち之に揖す。又曰く、「故有り、隙處に言ふべし」と。因りて行くこと數歩、人外に止まりて、「冥司公を追ふ。即ち去るべし」と言ふ）」（出典は唐・段成式『酉陽雜俎』）とあり、「隙處」は人目につかぬ物陰を言う。

○葦席 アシで編んだむしろ。敷物にも物を包むのにも用いる。「葦席」も同じ。後段に「蘆席」とあるのも同じ物を指す。「葦席」は『周礼』春官・司几筵に、「凡喪事設葦席（凡そ喪事には葦席を設く）」とあるように、葬儀に用いられた。『太平広記』では卷三三六・鬼二一「鄭望」に「其妻暴疾亡、以葦席裹屍、葬將軍墳側（其の妻暴かに疾みて亡ずれば、葦席を以て屍を裹み、將軍の墳の側に葬る）」（出典は唐・牛僧孺『玄怪録』）。

○數領 「領」は「席」を数える助数詞。『太平広記』では卷二九〇・妖妄三「又諸葛殷」に「駢遽下兩縣、率百姓葦席數千領、畫作甲兵之狀、遣用之於廟庭燒之（駢遽かにして兩県に下り、百姓の葦席數千領を率ゐて、甲兵の狀を畫き作し、之を用て廟庭に於いて之を燒かしむ）」（出典は唐・羅隱『妖乱志（広陵妖乱志）』）。

○天色 そら模様。おおむね、日が暮れる、夜が明けるといった時刻に関わる表現に用いられる。『河東記』では31「申屠澄」に「天色已晚、風雪不止（天色已に晩れ、風雪止まず）」。

【原文】 4

至家、見其身猶爲家人等抱持、灸^①療如故。不覺形神合而蘇。良久、思如夢非夢。乃曰、向者更何事。妻具言、家童^②中惡、作君語。索六百張紙作錢、以焚之。皆如前事。察頗驚異、遽^③至車子^④家。車家見察曰、君來、正解夢耳。夜來所^⑤夢、不似尋常。分明自君家、別與黃衫人載一車子錢至延福沈氏廟、^⑥歷歷如在目前。察愈驚駭、復與車子^⑦偕往沈氏廟。二人素不至此、既而宛然昨宵行止。即於廟西北角、見一兩^⑧片蘆蓆^⑨、其下紙縑存焉。察與車夫、皆識夜來致錢^⑩之所。即訪女人、守門者曰、廟中但有魏侍御於此、無他人也。沈氏有臧獲、亦住廟旁。聞語^⑪其事、及^⑫形狀衣服、乃泣曰、我太夫人也。其夕五更、魏氏一家、聞打門聲。使候之、即無所見。如是者三四、式^⑬意謂之盜。明日、宣言於^⑭縣胥、求備之。其日、式^⑮夜邀客爲煎餅、食訖而卒^⑯。察欲驗黃衫所言^⑰公事、嘗自於其側偵之、至是果然矣。出河東記。

【訓読】 4

家に至り、其の身を見るに猶ほ家人等に抱持せられ、灸療さるること故の如し。覺えず形神合して蘇る。良や久しうして、思ひは夢の如くにして夢に非ず、乃ち曰く、「向者^{さき}には更に何事ぞ」と。妻具に言ふ、「家童惡に中り、君が語を作して、六百張の紙を索めて錢と作し、以て之を焚かしむ」と。皆な前事の如し。察頗る驚き異とし、遽かに車子の家に至る。車家察を見て曰く、「君来るは、正に夢を解かんとするのみ。夜来夢みし所は、尋常に似ず。分明に君が家自り、別に黄衫の人と一車子に錢を載せて延福の沈氏の廟に

至ること、歴歷として目前に在るが如し」と。察愈いよ驚駭し、復た車子と偕に沈氏の廟に往く。二人素より此に至らざるも、既にして宛然として昨宵の行止なり。即ち廟の西北の角に於いて、一兩片の蘆蓆を見、其の下に紙縑存す。察と車夫と、皆夜来錢を致すの所なるを識る。即ち女人を訪ぬるに、門を守る者曰く、「廟中但だ魏侍御の此に有るのみにして、他人無し」と。沈氏に臧獲有りて、亦た廟の旁に住まふ。其の事を語るを聞き、形状衣服に及ぶに、乃ち泣きて曰く、「我が太夫人なり」と。其の夕べ五更にして、魏氏一家、門を打つ声を聞く。之を候はしむるに、即ち見る所無し。是の如くすること三四、式は意に之を盜なりと謂ふ。明日、県胥に宣言して、之に備へんことを求む。其の日、式夜に客を邀へて煎餅を爲り、食し訖りて卒す。察黄衫言ふ所の公事を験せんと欲し、嘗みに自ら其の側に於いて之を偵するに、是に至りて果して然り。河東記より出づ。

【訳】 4

家に着いてわが身を見るとまだ家人に抱きかかえられ、前と同様に灸をすえられている。いつの間にか身と心が一つになって、生き返った。しばらくして、辛察は夢うつつのままにようやくのこと、「いったいいままで何があったんだ」と言った。妻は、「召使が氣を失って、あなたの声色で、六百枚の紙を手に入れて錢にして燃やすようにと言ったのです」と詳しく語った。すべて先ほど見た通りであった。辛察はたいへん驚き不思議に思い、いそいで車夫の家に行った。車夫は辛察を見て、「あなた様のお越しは、ほかでもない夢解

きのためでしょう。昨夜見たのはただの夢ではありませんでしたよ。はつきり覚えています。お宅から黄杉の方と一緒に車いっぱい銭を積み込んで延福の沈氏の廟に行ったのが、ありありと目に浮かびます」と語った。辛察はますます驚き、ふたたび車夫と一緒に沈氏の廟に行った。二人とももとよりここに来たことはなかったのであるが、昨夜歩き回った場所の通りであった。廟の西北の隅にはアシのむしろが一、二枚あり、その下にはちゃんと紙銭が置かれていた。辛察にも車夫にも、昨夜銭を置いた場所であると知れた。すぐに女を訪ねると、門番は「廟の中には魏侍御がおられるだけで、他には誰もおられません」と言う。沈氏には召使がいて、やはり廟の傍らに住んでいた。召使は、昨夜の出来事を語るのを聞いていたが、女の姿や衣服に話しが及ぶや、とうとう泣きだして、「わたくしどもの奥様です」と言った。その夜、明け方近く五更のころ、魏氏の家では門を叩く音を聞いた。ようすを見にやらせたが、何事も無い。これを繰り返すこと三四回、魏式は盗賊だと思った。翌日、県の役人に訴えて警備を願い出た。その日、魏式は夜に客をもてなすのに煎餅をこしらえたのだが、これを食べ終えると死んでしまった。辛察は黄杉の男が言っていた「公務」が何であるかを確かめようとずつと廟のそばでうかがっていたのであるが、ここに至ってはたしてその通りになったのであった。『河東記』に出る。

【校記】 4

① 「灸」、談愷本・許本・黄本「炙」字に作り、四庫本「炙」に作る。

【校記】 1—③「灸」の注参照。

② 「童」、四庫本「僮」に作る。
③ 「遽」、会校本「遂」に作り、校記に「原作「遽」。現據沈本改」という。

④ 「子」、伝奇輯校本校記に「明鈔本作「主」、下文「復與車子偕往沈氏廟」同」とある。会校本校記にはこの個所の「子」に校記はないが、下文「復與車子偕往沈氏廟」の「子」には校記がある。

⑤ 「所」、会校本校記に「沈本作「得」とある。

⑥ 「歴歴」、会校本校記に「沈本作「由歴歴」とある。

⑦ 「子」、会校本校記に「沈本作「主」とある。

⑧ 「一兩」、会校本「兩」に作り、校記に「原作「二兩」。現據沈本改」という。

⑨ 「蓆」、四庫本「席」に作る。伝奇輯校本も「席」に作るが、校記はない。

⑩ 「錢」、会校本校記に「沈本作「身」とある。

⑪ 「語」、会校本校記に「沈本無此字」とある。

⑫ 「及」、会校本「及」字下に「見説其」三字有り。校記に「原無此三字。現據沈本補」という。伝奇輯校本も本文「見説其」を補い、校記に「此三字原無、據明鈔本補」という。

⑬ 「式」、会校本校記に「沈本作「皆」とある。

⑭ 「明日宣言於」、会校本校記に「沈本作「宣言明日人」とある。

⑮ 「式」、会校本校記に「沈本作「適」とある。

⑯ 「卒」、会校本「察卒」に作り、校記に「察 原無此字。現據沈本補」という。伝奇輯校本に会校本が「察」字を加えるのは「大

誤」とし、按語に「卒者乃魏式、前文云「魏式暴卒」、下文云「察欲驗黃衫所言公事」、文意甚明」という。伝奇輯校本が妥当である。

⑰「所言」、四庫本、この二字無し。会校本・伝奇輯校本共に校記無し。

【注】 4

○形神合而蘇 肉体と精神が一つになって、生き返る。「形」は肉体（魄）、「神」は精神（魂）。人は魂魄が分離すると死ぬとされ、ここでは両者がふたたび合して蘇生した。宋・陳景元『西昇經集註』卷五・民之章第二十九「形神合同固能長久」の李榮注に「魂離於人則身死、神將形合則命長也（魂人を離るれば則ち身死し、神と形と合すれば則ち命長し）」（『正統道藏』洞神部・玉訣類）。形と神については、『太平広記』では卷二七六・夢一「商靈均」に「商靈均、義熙中、夢人來縛其身將去、形神乖散（商靈均、義熙中、夢に人來りて其の身を縛し將去き、形神乖散せんとす）」（出典は『夢苑』。また「明鈔本作出異苑」とある。『夢苑』については李劍国『唐五代志怪傳奇叙録（増訂本）』一三八四頁に「佚」[唐]闕名撰。志怪集」という）。

○如夢非夢 夢うつつ。唐・釈道世『法苑珠林』卷三六・懸幡篇第三十二・引証部第二「感應緣」に典故を『冥祥記』として「琛之經七日便病、時氣危頓殆死、至九日方晝、如夢非夢（琛之經ること七日にして便ち病み、時氣危頓にして殆ど死せんとし、九日に至りて方に昼ならんとするに、夢の如くして夢に非ず）」。『太平広記』では卷三七四・靈異「金精山木鶴」に「師粲即一發而中、臂即無力、歸而病臥。如夢非夢、見二女道士、繞牀而行（師粲即ち一たび発し

て中るや、臂即ち力無く、歸りて病臥す。夢の如くして夢に非ず、二女道士の、牀を繞りて行くを見る）」（出典は南唐・徐鉉『稽神録』）。○更何事 いったい何事だ。「更」は下接する疑問の強調。白居易「醉後重贈晦叔」に「人間更何事、攜手送衰年（人間更に何事ぞ、手を携へて衰年を送らん）」（『全唐詩』卷四五一、『白氏文集』卷二八）。

○中惡 氣を失って人事不省となる。『太平広記』卷三二一・鬼六「郭翻」に郭翻の死後の出来事として「亡數日、其少子忽如中惡狀、不復識人、作靈語、音聲如其父、多知陰世、所問皆答（亡くなりて數日、其の少子忽ち中惡の状の如く、復た人を識らず、靈語を作し、音聲其の父の如く、多く陰世を知り、問ふ所は皆答ふ）」（出典の記載なし）。死後に身近な人物の口を借りて現世の人に語りかける場面であり、しかも何者かに憑依された人物のようすを「中惡」と表現するのは本話と共通する。『河東記』では17「韋浦」に、子どもの背中を手で突いたところ、「乃見歸以手捏其背、稚兒即驚悶絕。食頃不寤。主人曰、是狀爲中惡（乃ち歸の手を以て其の背を捏くに、稚兒即ち驚き悶絶するを見る。食頃にして寤めず。主人曰く、「是の状は中惡爲り」と）」とある。

○六百張紙 六百枚の紙。「張」は紙などを数える助数詞。『河東記』では27「許琛」に「今此有事、切要五萬張紙錢、望求好紙燒之（今此に事有り、切に五萬張の紙錢を要す、望むらくは好紙を求めて之を焼かんことを）」。

○車子家 車夫の家。「車子」は後文に「載一車子錢（一車子に錢

を載す」とあるように車の意に用いることが多いが、さらに後文に「復與車子偕往沈氏廟。二人素不至此（復た車子と与に偕な沈氏の廟に往く。二人素より此に至らず）」とあるように、ここでは「車子」は車夫の意。また、「遽至車子家」に続いて「車家見察曰」とある「車家」もやはり車夫の意。

○解夢 夢の意味を解き明かす。『太平広記』には他に二例を見る。卷二七九・夢四・夢咎徵「張瞻」に「江淮有王生者、勝言解夢（江淮に王生なる者有り、勝に「解夢」と言ふ）」（出典は唐・段成式『酉陽雜俎』）とあり、白で飯を炊く夢を見た男に、「家に帰っても奥様はいないでしょう。白で炊くのは釜が無いためののです（「釜」は奥様の意の「婦」と音が似る）」と夢解きをしている。同じく卷二八〇・夢五・鬼神上「麻安石」に「安石檢解夢書（安石解夢の書を検す）」（出典は唐・麻安石『祥異集驗』）とあり、自分が見た夢を「解夢書」によって調べ、夢解きする様子が記される。「解夢書」については、湯浅邦弘「夢の書の行方―敦煌本『新集周公解夢書』の研究―」（『待兼山論叢』二九（哲学）、一九九五年）を参照。

○歴歴如在目前 ありありとして目の前に在るかのようだ。しばしば非現実的な事柄がはっきりと現前に展開される場合に言われる。『河東記』では04「葉靜能」に、不思議な侏儒が天地開闢以来の歴史やあらゆる学問を論じては「歴歴如指諸掌焉（歴歴として諸を掌に指すが如し）」。

○行止 行くと止まると。人の行動。『河東記』では05「韋丹」に「行止迂怪、占事如神（行止迂怪なるも、事を占ひては神の如し）」と

見えるほか、07「李敏求」にも見える。

○蘆蓆 アシで編んだむしろ。【注】3に見える「葦蓆」に同じ。『太平広記』では他に一例、卷五五・神仙五五「伊用昌」に「以蘆蓆裹尸、於縣南路左百余步而瘞之（蘆蓆を以て尸を裹み、県の南路の左百余歩に於いて之を瘞む）」（出典は後周・王仁裕『玉堂閑話』）。なお、『淮南子』脩務訓に「夫鴈順風、以愛氣力、銜蘆而翔、以備矰弋（夫れ雁は風に順ひて、以て氣力を愛しみ、蘆を銜みて翔りて、以て矰弋に備ふ）」とあり、高誘注に「未秀曰蘆、已秀曰葦（未だ秀でざるを蘆と曰ひ、已に秀でるを葦と曰ふ）」とあるが、ここでは「葦蓆（蓆）」と「蘆蓆」とにとくに区別はないであろう。

○紙緡 紙銭に同じ。「緡」はひもを通して束ねた穴あき銭。また千文を一緡と数える。ここでは束ねた紙銭をイメージして言う。『太平広記』には他に一例、卷一三〇・報応二九・婢妾「嚴武盜妾」に嚴武がかつて殺害した女がうらみを訴えてきたのに対して、「武悔謝良久、兼欲厚以佛經紙緡祈免（武悔謝すること良久しうして、兼ねて厚く仏経紙緡を以て免れんことを祈らんと欲す）」（出典は唐・盧肇『逸史』）。

○臧獲 召使い。司馬遷「報任少卿書」（『文選』卷四一）に「且夫臧獲婢妾、由能引決（且つ夫れ臧獲婢妾も、由ほ能く引決す）」とあり、李善注に晋灼、韋昭の注を引いて「臧」と「獲」の相違を様々に説く。『太平広記』では本話以外に三例を見る。卷三三四・鬼一九「朱敖」に「時盛暑、見綠袍女子、年十五六、姿色甚麗。敖意是人家臧獲（時に盛暑にして、緑袍の女子を見る、年は十五六、姿色甚だ麗

し。敖意へらく是れ人家の臧獲ならん」と（出典は唐・戴孚『広異記』）とあるのは、実は廟中の神女を臧獲と見たもの。

○太夫人 人の母親を尊んで呼ぶ語。『河東記』では11「盧佩」に「請一見太夫人。必取平差請（請ふ一たび太夫人に見へん。必ず平差を取らん）。」「河東記」訳注稿（五）（『名古屋大学中国語学文学論集』第三一輯、一四五頁）【注】2「太夫人」参照。

○縣胥 県の役人。県の胥吏、県吏。『太平広記』では本話に見えるのみ。唐・元稹「估客樂」に「市卒酒肉臭、縣胥家舍成（市卒酒肉臭く、県胥家舍成る）」（『全唐詩』巻四一八、『元氏長慶集』巻二三）。

○煎餅 餅の一種。センベイ。形は平で、一度に何枚か食べられるほどの大きさがあり、夜食ともなった。早くは『荊楚歲時記』正月七日の条に「北人此日食煎餅。於庭中作之云薰天。未知所出也（北人此の日煎餅を食す。庭中に於いて之を作り薰天と云ふ。未だ出づる所を知らず）。」「唐六典」巻一五の注に、光録寺の百官の膳食について「正月七日、三月三日、加煎餅」とある。『太平広記』には「煎餅」が本話を含めて全部で六話十例登場し、これらによれば「煎餅」は普段に食されていたようである。このうち夜の場面に登場するのは四話六例を数え、しかも妖異のものが「煎餅」を奪い取るという話が目につく。「辛察」以外の三話は、巻三六五・妖怪七「孟不疑」（出典は唐・段成式『酉陽雜俎』）、巻三六六・妖怪八「杓兒」（出典は唐・皇甫枚『三水小牘』）、巻二二〇・医三「孫光憲」（出典は五代十国・荊南・孫光憲『北夢瑣言』）。「孟不疑」に次のように

ある。淄青の張評事なる者が夜にある駅に到着するや、駅吏を呼んで煎餅を求めた（「張連呼驛吏、索煎餅」）。孟が様子をうかがうと、黒い猪のようなものが煎餅を乗せた皿にくつついて、灯火の所で消えてしまった。孟は恐れて寝てしまったが、翌朝、張が孟に挨拶に来て、昨夜のことは他言しないように、と言って金をくれた。数日後、張評事が失踪したので調べたところ、駅の隅に筵にくるまれて白骨がみつき、履が片方残されていた。この後に、「舉人祝元膺嘗言、親見孟不疑説、每誠夜食必須祭也（舉人祝元膺嘗て言ふ、「親しく孟不疑の説くを見るに、毎に夜に食するには必ず須らく祭るべしと戒しむ」と）」（『酉陽雜俎』前集卷一五・諾臯記下）とある。「夜食」の時に「祭」とは、鬼神に供物を捧げる行為と解される。【参考】の「煎餅」と鬼神」参照。

【参考】

本話は、冒頭に「大和四年十二月九日」と年月日を明示し、魏式なる人物が「長安延福里沈氏私廟中」で暴卒したことを述べたあと、「前二日之夕」と時間を二日間さかのぼり、辛察という別の人物を登場させて、辛察の立場からその後の二日間の出来事を順次展開し、最後に再び魏式を登場させて、冒頭の一行に接続するという、きわめて緻密な時間構成を有する。作品の舞台となる空間についても、延福里の沈氏私廟を軸に、勝業里・長興里・延平門を配して、辛察が一度目は黄衫の人と、二度目は車屋と、同じ場所をたどって沈氏の私廟に行き着き、ことの顛末を解き明かすという巧みな設定

をとっている。私廟の女人の素性が、翌日になって召使の口から明かされるという副次的な構成にも意図的な工夫が認められる。

また本話は、『太平広記』の部門では「再生」に収められるように再生譚の一つに数えられるが、しかし他の再生譚にしばしば見られるような再生の過程であの世のありさまを見て回るといった設定をもたず、「解夢」の面白さが主となっている。ただし、これを「解夢」とするのは車屋の立場であって、辛察にとっては現実に魂魄分離してのちふたたび蘇生するという実体験を語るものである。本話は、冥界での出来事の真实性を現世で確認し、あの世とこの世とが連続性をもっていることを示す物語とも言えよう。

○「煎餅」と鬼神

魏式が夜に煎餅を食べ終わって死んでしまったのはなぜか、「辛察」にはその理由は記されておらず、不明とする他はない。しかし、夜に「煎餅」を食べることと、妖異の出現とは関係があると思われる。そのことは【注】4「煎餅」の注に挙げた「孟不疑」に関して許逸民氏が『西陽雜俎校箋』（中華書局、二〇一五年）一〇五七頁の注に指摘する『類説』卷四三所収『北夢瑣言』『煎餅招鬼』によって知ることが出来る。左に嚴一萍校訂『類説』（芸文印書館、一九七〇年）によって当該箇所を掲げる。

夜作煎餅、多招鬼神。有儒生出通衢、有云、昨夜崇福院僧作煎餅肉羹、被我番其鼎器。其肉羹和灰埋花欄中。又一鬼於人家不得煎餅、推其小婢落火。復一鬼至、云、我能醫火燒瘡、爾但

與我煎餅。因教之。有姬、夜作煎餅、窗中忽露一青手、遺餅而沒。夜に煎餅を作ると、しばしば鬼神を招き寄せる。ある儒生が大通りに出たところ、誰かがこう言った。「昨夜、崇福院の僧が煎餅と肉羹を作ったので、自分は鍋をひっくり返した。肉羹の方は灰といっしょに花壇に埋めてやった。」またある鬼は人家で煎餅を手に入れることができず、小間使いを火の中に突き落とした。またある鬼がやってきてこう言った。「自分は火傷の痕を治すことができる、お前はおれに煎餅をよこすだけでよいのだ。」そこでこれに教えた。ある姫が夜に煎餅を焼いたところ、窓からいきなり青黒い手が現れたので、煎餅をやったら引っ込んだ。

冒頭に「夜作煎餅、多招鬼神」と言うのは一種の諺の類を思わせ、その後に、夜に煎餅を焼くと鬼神がやってきて欲しがり、手に入らぬと悪さをするという例を列挙している。このうち火傷の痕を治す話は『太平広記』卷二二〇・医三「孫光憲」に見えている。

火燒瘡無出醋泥、甚驗。孫光憲嘗家人作煎餅、一婢抱玄子擁爐、不覺落火炭之上。遽以醋泥傳之、至曉不痛、亦無癰痕。是知俗說不厭多聞。（出典は五代十国・荊南・孫光憲『北夢瑣言』）火傷の痕には醋泥ほど効くものはない。孫光憲の家では以前煎餅を作ったことがあったが、召使が子供を抱いて炉を囲んでいたところ、うっかり炭火の上に落してしまった。すぐに醋泥を塗ると、明け方には痛まず、跡も残らなかった。世間で言われることは、何でも聞いておくものだ。

ここには「夜」を意味する語は見えないが、「至曉不痛」とあるから、やはり夜に火を起こして煎餅を焼いていたものと解される。

さらに、先の『類説』所収の一条の最後に見える、窓から手が伸びてきたという話は『酉陽雜俎』卷一五・諾臯記下「惠恪」に見える話を連想させる。

陵州龍興寺惠恪……常夜會寺僧十餘、設煎餅。二更、有巨手被毛如胡鹿、大言曰、乞一煎餅。衆僧驚散、惟惠恪掇煎餅數枚、置其掌中。魅因合拳、僧遂極力急握之。魅哀祈、聲甚切、惠恪呼家人斫之。及斷、乃鳥一羽也。

陵州龍興寺の惠恪は、ある晩、寺僧十余人と会するのに、煎餅を用意した。二更のころ、胡鹿のように毛むくじやらの大きな手が出てきて大声で「煎餅を一枚いただきたい」と言った。僧たちはびっくりして逃げたが、惠恪だけは煎餅数枚を集め、その掌に置いてやった。魅がこぶしを握り合わせると、僧は力いっぱいその手をつかんだ。魅は悲しげな声で哀願したが、惠恪は家の者呼んでこれを切らせた。切り落とすと、なんと鳥の翼であった。

右は『類説』にいう「一青手」とは別の話であろうが、夜に煎餅を焼いていると妖異のものが手を出して奪っていくという点は共通する。「惠恪」の場合は「二更」とあるから、煎餅は今で言う夜食に供されたものと解される。

以上により、少なくとも唐代には、夜の煎餅は妖異を招き寄せるという話が様々に語られていたことが知られる。「辛察」の末尾に

見える、魏式が夜に煎餅を食べて卒したという設定には、唐代における「煎餅招鬼」の俗がその背景にあるものと考えられる。また、【注】4「煎餅」の項に挙げた「孟不疑」の末尾に「毎誠夜食必須祭也」とあるのは、夜食の前に予め鬼神に煎餅を供物として捧げ、これを祭ることによって鬼神が無法な行為に及ぶといった事態を避けるため、ということになるであろう。

なお、現行の『北夢瑣言』二十卷には『類説』が引く右の一条は含まれず、賈二強点校『北夢瑣言』（唐宋史料筆記叢刊、中華書局、二〇〇二年）では、「北夢瑣言逸文補遺」に「煎餅招鬼」と題して『類説』卷四三からこれを収める。

○「辛察」収録文献

後世の文献で「辛察」を収めるものは少ないが、左の三点を挙げることが出来る。

明・馮夢龍『太平広記抄』卷六一・再生「辛察」

明・胡我琨『錢通』卷一九・冥夢（「辛察」の節録）

明・李世熊『錢神志』卷三・冥賂第六（「辛察」の節録）

（澤崎久和）

第三十二話 盧從事（卷四百三十六・畜獸三・馬）

【全文】

嶺南從事盧傳素寓居江陵。元和中。常有人遺一黑駒。初甚蹇劣。傳素參養歷三五年。稍益肥駿。傳素未從事時。家貧薄。屹屹乘之。甚勞苦。然未常有銜檠之失。傳素頗愛之。一旦。傳素因省其槽檻。偶戲之曰。馬子得健否。黑駒忽人語曰。丈人萬福。傳素驚怖却走。黑駒又曰。阿馬雖畜生身。有故須曉言。非是變怪。乞丈人少留。傳素曰。爾畜生也。忽人語。必有冤抑之事。可盡言也。黑駒復曰。阿馬是丈人親表甥。常州無錫縣賀蘭坊玄小家通兒者也。丈人不省貞元十二年。使通兒往海陵賣一別墅。得錢一百貫。時通兒年少無行。被朋友相引狹邪處。破用此錢略盡。此時丈人在遠。無奈通兒何。其年通兒病死。冥間了了。爲丈人徵債甚急。平等王謂通兒曰。爾須見世償他錢。若復作人身。待長大則不及矣。當須暫作畜生身。十數年間。方可償也。通兒遂被驅出畜生道。不覺在江陵群馬中。卽阿馬今身是也。阿馬在丈人槽檻。于茲五六年。其心省然。常與丈人償債。所以竭盡蹇蹇。不敢居有過之地。亦知丈人憐愛至厚。阿馬非無戀主之心。然記傭五年。馬畜生之壽已盡。後五日。當發黑汗而死。請丈人速將阿馬貨賣。明日午時。丈人自乘阿馬出東棚門。至市西北角赤板門邊。當有一胡軍將。問丈人買(買原作賣。據明鈔本改。)此馬者。丈人但索十萬。其人必酬七十千。便可速就之。言事訖。又曰。兼有一篇。留別丈人。乃驤首朗吟曰。既食丈人粟。又飽丈人芻。今日相償了。永離三惡途。遂奮迅數遍。嘶鳴齧草如初。傳素更與之言。終不復語。其所言表甥姓字。盜用錢數年月。一無所差。傳素深感其事。明日。試乘至市角。果有胡將軍懇求市。傳素微驗之。因賤其估(明鈔本估作直索。)六十緡。軍將曰。郎君此馬。直七十千已上。請以七十千

市之。亦不以試水草也。傳素載其緡歸。四日。復過其家。見胡(胡原作故。據明鈔本改。)軍將曰。嘻。七十緡馬(馬字原闕。據明鈔本補。)夜來飽發黑汗斃矣。出河東記

【原文】 1

嶺南從事盧^①傳素寓居江陵。元和中、常有人遺一黑駒。初甚^②蹇劣、傳素參養歷三五年、稍益肥駿。傳素未從事時、家貧薄、屹屹乘之、甚勞苦。然未常^③有銜檠^④之失、傳素頗愛之。一旦、傳素因省其槽檻^⑤、偶戲之曰、馬子得^⑥健^⑦否^⑧。黑駒忽人語曰、丈人萬福。傳素驚怖却走。黑駒又曰、阿馬雖畜生身、有故須曉言。非是變怪、乞丈人少留。傳素曰、爾畜生也、忽^⑨人語、必有冤抑之事。可盡言也。

【訓読】 1

嶺南從事の盧傳素は江陵に寓居せり。元和中、常て人の一黑駒を遺る有り。初め甚だ蹇劣なるも、傳素參養して三五年を歴るに、稍く肥駿を益す。傳素未だ從事たらざりし時、家は貧薄なれば、屹屹として之に乗り、甚だ勞苦せしむ。然れども未だ常て銜檠の失有らざれば、傳素頗る之を愛す。一旦、傳素其の槽檻を省るに因りて、偶之に戯れて曰く、「馬子よ健なるを得たるや否や」と。黑駒忽ち人語して曰く、「丈人万福」と。傳素驚怖して却走せんとするに、黑駒又た曰く、「阿馬は畜生の身なりと雖も、故有りて曉言するを須ふ。是れ變怪に非ざれば、乞ふ丈人の少く留まらんことを」と。傳素曰く、「爾畜生なるも、忽ち人語せるは、必ず冤抑の事有らん。言を尽くすべし」と。

【訳】 1

のちの嶺南従事の盧伝素は、江陵に仮住まいしていた。元和年間に、一頭の黒馬を贈ってくれた人があった。最初は全くの駄馬だったが、伝素が数年飼育育てるうちに、次第に肥えて良馬となった。まだ従事となる以前、伝素は家が貧しかったので、あくせくと乗り回して酷使した。だが、馬は暴れて事故を起こすようなこともなかった。ので、大変可愛がっていた。ある日のこと、その馬屋を覗いた折、ふと戯れに「馬君よ、達者でいるかい」と声をかけてみた。すると黒馬は不意に人の言葉で、「御老人、ごきげんよろしゅう」と言った。伝素が驚き恐れて逃げ出そうとすると、黒馬はさらに、「私は畜生の身ではありますが、訳あってお話し上げる手立てをとりました。決して怪しい者ではございませんので、どうかしばらくお留まり下さい」と言う。そこで伝素は、「畜生」でありながら不意に人語するというのは、きっと冤罪の恨みでもあるのだろう。仔細に申してみよ」と言った。

【校記】 1

- ① 「盧」、会校本校記に「沈本・陳本作「靈」。下同」とある。伝奇輯校本も同じ。
- ② 「甚」、会校本校記に「沈本作「甚爲」とある。
- ③ 「常」、会校本は「嘗」に作り、校記に「原作「常」。現據陳本改」という。伝奇輯校本は「常」に作り、校記の按語に「未常、即未嘗」という。
- ④ 「槩」、会校本は「蹶」に作り、校記に「原作「槩」。現據孫本・

沈本・陳本改」という。伝奇輯校本は「槩」に作り、按語に「槩、同「概」、跌倒、顛仆、與「蹶」義同」という。

- ⑤ 「櫪」、会校本校記に「沈本作「棧」とある。伝奇輯校本は「槽櫪」に作り、校記に「明鈔本作「槽棧」。『勸善書』作「皂棧」といい、按語に「皂棧、馬廐」として『莊子』馬蹄篇の用例を引く。『勸善書』は、明・仁孝皇后徐妙雲『大明仁孝皇后勸善書』の略称。四庫全書存目叢書に明刊本の影印が収められ、伝奇輯校本はこれに拠っている。
- ⑥ 「子得」、会校本校記に「沈本無此二字」とある。
- ⑦ 「健」、底本は「健」。四庫本・筆記本は「健」に作る。「健」は「健」の異体字。会校本・伝奇輯校本は「健」に改める。これに従う。
- ⑧ 「否」、許本は「否」字を「不」に作る。会校本・伝奇輯校本には校記なし。
- ⑨ 「忽」、許本は「忽曉」に作る。会校本・伝奇輯校本には校記なし。

【注】 1

○嶺南 五嶺（江西省・湖南省・広東省・広西壮族自治区の境界にわたる五つの山脈を指し、諸説あり）の南の僻地。嶺外。嶺表。『旧唐書』卷三八・地理志一に、貞観元年（六二七）全国を十道に分けた記事が見え、その最後に「十曰嶺南道」とある（『新唐書』では卷三七・地理志一）。

○従事 官名。漢代以降、三公や州郡の長官は自ら属官を採用する権限を持ち、多くこれを従事と称した。牛志平・姚兆女『唐人称谓』（隋唐歴史文化叢書・三秦出版社、一九八七年）を参照（二六頁）。

唐代では、藩鎮や地方長官の幕僚・属官の汎称として用いられる。

『河東記』では他に28「崔紹」、29「辛察」に見える。なお唐代の従事については、方建春「唐代『従事』考論」（『固原師專学報』）社会科学版、第二六巻第五期、二〇〇五年九月）の論考がある。

○**盧傳素** 人名。他に資料が見当たらない。『全唐詩』巻八六七・怪に所収の「黑駒別盧傳素詩」は、本話中の挿入詩。また『新唐書』巻七三上・宰相世系表上・盧氏に「傳禮、均州刺史（伝礼、均州の刺史たり）」の記載があり、盧伝素の名と「傳」字が重なる。ここから兄弟あるいは同族の従兄弟の可能性も考えられるが、表によればこの人物は、徳宗（在位七七九～八〇四）期の悪名高い宰相盧杞（？～七八五）と同世代に配列されている。盧伝素は、後文に言うように憲宗元和期（八〇六～八二〇）の人であり、世代が一つ降る別人のようにも思われる。盧伝礼については、やはり他に資料がなく、詳細不明。

○**江陵** 郡あるいは県の名。今の湖北省南部。江陵城は長江中流域北岸に位置し、水運あるいは軍事上の要地として発展した。東晋以降、しばしば荊州の治所となったので、「荊州」の名でも呼ばれる。『旧唐書』巻三九・地理志二・山南東道・荊州江陵府、『新唐書』巻四〇・地理志・山南道などに記載がある。『河東記』においても、他に19「成叔弁」、21「臧夏」、27「許琛」の三話にこの地名が見える。

○**元和** 唐の憲宗の時の年号。西暦八〇六～八二〇年。『河東記』においてこの年号が見える作品は、他に05「韋丹」、06「呂群」、10「板橋三娘子」、12「党國清」、13「柳渢」、19「成叔弁」、28「崔紹」

の七話。

○**黑駒** 黒馬。『太平御覧』巻九三六・鱗介部八・魚下・鯉魚に引く晋・崔豹『古今注』に「兖州人、呼赤鯉爲赤驥、青鯉爲青馬、黑鯉爲黑駒、……（兖州の人は、赤鯉を呼びて赤驥と爲し、青鯉青馬と爲し、黒鯉黒駒と爲し、……）」とある。（ただ、現在通行の『古今注』巻中・魚虫第五では「黒駒」を「玄駒」に作る。）意外に稀見の語で、唐代以前では他に用例が見当たらない。

○**蹇劣** のろく鈍い。唐・薛用弱『集異記』の「裴珙」に「下駟蹇劣、日勢已晚、方至石橋（下駟蹇劣にして、日勢已に晩れ、方めて石橋に至る）」とある。『太平広記』では本話の一例のみ。

○**參養** 飼育する。やしなう。「參」は、家畜を飼育する。『旧唐書』巻一九九下・北狄伝・室韋に、「畜宜犬豕、參養而噉之（畜は犬豕に宜しく、參養して之を噉らふ）」とある。『太平広記』では他に一例、巻一三三・報応三二・殺生「何澤」に「參養鵝鴨千百頭、日加烹殺（鵝鴨を參養すること千百頭に、日に烹殺を加ふ）」（出典は後唐・王穀『報応録』）。

○**三五年** 数年。『太平広記』では他に四例、一例を挙げれば巻一九三・豪俠一「虬髯客」に、「太原李氏眞英主也。三五年内、即當太平（太原の李氏は眞の英主なり。三五年内に、即ち當に太平なるべし）」とある（出典は『虬髯伝』）とあり、李劍国説によれば撰者は唐・裴鉞）。

○**肥駿** 馬が肥えて立派なこと。唐代以前の用例が意外に見当たらない。『太平広記』では本話の一例のみ。宋・邵子『擊壤集』巻一に「外

厩列肥駿、後庭羅織妍（外厩には肥駿を列ね、後庭には織妍を羅ぬ）。

○貧薄 まずしく乏しい。『後漢書』卷五二・崔寔伝に「歷位邊郡而愈貧薄、建寧中病卒家（辺郡を歴位して愈いよ貧薄、建寧中に病にて家に卒す）」とある。『太平広記』では他に一例、卷一五一・定数部「孟君」に「某貧薄疾病、必不可救（某は貧薄疾病にして、必ず救ふべからず）」（出典は唐・盧肇『逸史』）。

○砧 勤勉に働いて怠らないさま。『漢書』卷六四下・王褒伝に「勞筋苦骨、終日砧砧（筋を勞し骨を苦しめ、終日砧砧たり）」とある。『太平広記』にも数例、一例を挙げれば卷三三七・鬼部「李晝」に、「見五女子、衣華服、依五方、坐而紉針、低頭就燭、砧砧不歇（五女子の、華服を衣、五方に依り、坐して紉針し、頭を低れて燭に就き、砧砧として歇まざるを見る）」（出典は唐・谷神子『博異志』）。

○銜槩之失 馬があばれて、くつわが外れるような事故。『漢書』卷五七下・司馬相如伝に、「且夫清道而後行中路馳、猶時有銜槩之變（且つ夫れ道を清めて而る後に中路を行きて馳するも、猶ほ時に銜槩の變有り）」とあるのに基づく。『太平広記』ではこの一例のみ。

○槽檻 かいばおけ。転じて、うまや、馬小屋。『後漢書』卷五四・馬援伝に「今者歸老、更欲低頭與小兒曹共槽檻而食（今は歸老し、更に頭を低れて小兒の曹と槽檻を共にして食らはんと欲す）」とある。『太平広記』では、他に卷三三九・諂佞一「裴延齡」に「厩馬冬月合在槽檻秣飼、夏中即須有牧放處（厩馬は冬月には合に槽檻に在りて秣飼すべく、夏中には即ち須らく牧の放つ處有るべし）」（出典は唐・胡璩『譚賓録』）。

○馬子 馬に対する呼称であるが、正確な意味、ニュアンスが不明。『太平広記』の現代中国語訳では、天津古籍出版社本が「馬先生」、河北教育出版社本が「馬崽子」。「馬先生」は、ふざけて尊称を使つたとの解釈であろう。「馬崽子」の「崽」は子供、また人を罵り呼ぶ言葉にも用いられる。こちらの解釈では逆に馬を蔑んで呼んでいることになる。なお、『太平広記』に「馬子」の用例を搜してみると、人名としての「馬子」が見える。例えば卷一三三・報応三二・殺生「何馬子」に「逐州人何馬子好食蜂兒（逐州の人何馬子好んで蜂兒を食らふ）」（出典は後蜀・周玘『敝戒録』）、卷二七六・夢一「馮孝將」に「廣平太守馮孝將、男馬子、夢一女人（広平の太守馮孝將、男は馬子、一女人を夢む）」（出典は南朝宋・劉義慶『幽明録』）。同じ話は卷三七五・再生一にも「徐玄方女」と題して載る（出典は唐・道世『法苑珠林』）。このように人名に用いられることから考えて、「馬子」を蔑称とは考えにくい。他に卷二八四・幻術一「扶婁國人」には次のような用例がある。「南垂有扶婁之國、其人善能機巧變化、易形改服。……或爲巨象獅子龍蛇犬馬子狀、或爲虎口中生人（南垂に扶婁の國有り、其の人善く機巧變化を能くし、形を易へ服を改む。……或いは巨象・獅子・龍蛇・犬馬子の状を爲し、或いは虎口中に人を生ずるを爲す）」（出典は前秦・王嘉『拾遺録』）。ここに言う「犬馬子」の「子」は接尾語のようであり、本話の「馬子」も或いはこうした用法であろうか。

○得健否 元氣かね。相手の健康状態を尋ねる挨拶用語であろう。唐・齊己「懷體休上人」に「仲宣樓上望重湖、君到瀟湘得健無（仲

宣樓上に重湖を臨む、君瀟湘に到りて健を得しや無^{いな}や」(『全唐詩』卷八四六)とある。また唐・白居易「寄元九」に「健否遠不知、書多隔年得(健否遠くして知らず、書は年を隔てて得ること多し)」(『全唐詩』卷四三三、『白氏文集』卷一〇)、「同友人尋澗花」に「且作來歲期、不知身健否(且く來歳の期を作さん、身の健否を知らざるも)」(『全唐詩』卷四三三、『白氏文集』卷一〇)とあり、ここでは「健否」が熟語となっている。

○丈人 老人や年長者に対する敬称。牛志平・姚兆女『唐人称谓』を参照(九〇頁)。常用の語で『太平広記』にも多数、『河東記』では05「韋丹」、19「成叔弁」に見える。ここで「丈人」と呼びかけられた伝素は、後文で明らかにするように、転生したこの馬のおじに当たり、実の「おじさん」に対する呼称としても用いられたことが分かる。

○萬福 相手を祝福することば。唐代、婦人の挨拶用語として使われるが、男性が用いる場合もあったようである。『太平広記』卷九六・異僧部「廻向寺狂僧」に、老僧の言葉として「唐皇帝萬福」の語が見える(出典は唐・盧肇『逸史』)。

○驚怖 驚き恐れる。古くは『莊子』逍遙遊篇に見えるが、常用の語で『太平広記』にも二十数例。卷二二・神仙部「羅公遠」には「叱曰、汝何故離本處、驚怖官司耶。不速去(叱して曰く、「汝何故に本處を離れ、官司を驚怖せしむるか。速やかに去らざらんや」と)」とある(出典は前蜀・杜光庭『神仙感遇伝』『仙伝拾遺』、唐・盧肇『逸史』)。

○却走 退却して逃走する。逃げ出す。『後漢書』卷六五・段熲伝に「熲自率步騎進擊水上、羌却走。因與熲等挾東西山、縱兵擊破之、羌復敗散(熲自ら步騎を率ゐて水の上に進撃するに、羌は却走す。因りて熲等と与に東西の山を挟み、兵を縦にして之を撃破す)」。『太平広記』には他に六例、うち一例が『河東記』で、23「盧燕」に「燕惶駭却走(燕惶駭して却走す)」とある。

○阿馬 「阿」は、人にかかわる語に用いて親しみをあらわす接頭語。口語的な用法で、相手に対する呼称に附されるが、それが自称となることもある(たとえば、おじの自称としての「阿父」)。ここでは馬としての自称に使われている。

○曉言 言葉に出してはつきりいう、の意であろう。ただ、用例が意外に見当たらない。

○變怪 化け者。妖怪。『漢書』卷七六・張敞伝に「祇祥變怪、不可勝數(祇祥變怪、勝げて數ふるべからず)」とある。『太平広記』ではもう一例、卷四二六・虎部「師道宣」に「忽道天地變怪之事(忽ち天地變怪の事を道ふ)」(出典は南朝宋・東陽無疑『齊諧記』)。

○少留 しばらく留まる。わずかな間とどまる。常用の表現で、『太平広記』にも二十数例。多くは会話中に用いられているが、幾つかを挙げれば、卷五・神仙五「墨子」に「願且少留、誨以道要(願はくは且つ少く留まり、誨ふるに道要を以てせよ)」(出典は晋・葛洪『神仙伝』)、卷九五・異僧九「洪昉禪師」に「請師且少留(請ふ師の且つ少く留まらんことを)」(出典は唐・牛肅『紀聞』)、卷二八二・夢七・夢遊下「邢鳳」に「幸少留(幸ひに少く留まれよ)」(願復

少留（願はくは復た少く留まらんことを）」（出典は唐・李玫『異聞録』、卷三四三・鬼二八「陸喬」に「願得少留、以侍談笑（願はくは少く留まりて、以て談笑に侍ることを得ん）」（出典は唐・張説『宣室志』）などとある。

○冤抑 無実の罪におちいる。ぬれぎぬ。冤罪。漢・東方朔「七諫」怨世に「獨冤抑而無極兮、傷精神而壽夭」（独り冤抑されて極まり無く、精神を傷めて寿夭にす）とある（漢・王逸『楚辞章句』卷一三）。『太平広記』には他に五例、うち一例が『河東記』で、08「獨孤遐叔」に「其妻冤抑悲愁、若無所控訴（其の妻は冤抑悲愁するも、控訴する所無きが若し）」。

○盡言 言葉を尽くして詳しく語る。言いたいことを思いのまま直言する。古くは『国語』卷三・周語下に「唯善人能受盡言、齊其有乎（唯だ善人のみ能く尽言を受くるも、齊には其れ有らんや）。常用の語で『太平広記』には十余例。二、三挙げれば、卷三七・神仙三七「楊越公弟」に「復重問、曰、爲君所迫、我乃盡言。……（復た重ねて問ふに、曰く、「君の迫る所と為れば、我は乃ち言を尽くさん。……」）」（出典は唐・盧肇『逸史』、卷九二・異僧六「惠照」に「照曰、此非立可盡言。當與子一夕靜語耳（照曰く、「此れ立ちどころに言を尽くすべきに非ず、当に子と一夕靜語せんのみ」と）」（出典は唐・張説『宣室志』、卷一七七・器量二「元載」に「魚朝恩於國子監高坐講易、盡言鼎卦、以挫元載・王縉（魚朝恩 國子監に於いて高坐して易を講じ、鼎卦を尽言し、以て元載・王縉を挫く）」（出典は唐・李肇『国史補』）などとある。

【原文】 2

黑駒復曰、阿馬是丈人親表甥、常州無錫縣賀蘭坊玄小家^①通兒者也。丈人不省貞元十二年、使通兒往海陵賣一別墅、得錢一百貫。時^②通兒年少無行、被朋友相引狹邪處、破用此錢略盡。此時丈人在遠、無奈通兒何。其年通兒病死、冥間^③了了、爲丈人徵債甚急。平等王謂通兒曰、爾須見世償他錢。若復作人身、待長大則不及矣。當須暫作畜生身、十數年^④間、方可償也。通兒遂被驅出畜生道、不覺在^⑤江陵群馬中、即阿馬今身是也。

【訓読】 2

黒駒復た曰く、「阿馬は是れ丈人の親表甥にして、常州無錫県の賀蘭坊玄小家の（賀蘭方玄小字）通兒なる者なり。丈人省らざるや、貞元十二年に通兒をして海陵に往きて一別墅を売らしめ、錢一百貫を得たるを。時に通兒は年少くして行ひ無く、朋友に狹邪の処に相引かれ、此の錢を破用して略ぼ尽くせり。此の時丈人は遠きに在りて、通兒を奈何ともする無し。其の年に通兒病死せるに、冥間は了了たりて、丈人の爲に債を徵すること甚だ急なり。平等王通兒に謂ひて曰く、『爾^{なんぢ}須^{すべ}らく見世に他の錢を償ふべし。若し復た人身と作し、長大するを待たば則ち及ばず。当に須らく暫らく畜生の身と作し、十數年間にして方に償ふべきなり』と。通兒遂に畜生道に驅出せられ、覺えず江陵の群馬の中に在り。即ち阿馬の今身是なり。

【訳】 2

黒馬はまた言った、「私奴は御老人の母方の甥で、常州無錫県の賀蘭坊玄小家の通児（賀蘭方玄幼名を通児）という者です。貴方はお忘れでしょうか、貞元十二年に私を海陵にやって別荘を一軒売らせ、錢一百貫を得られたことを。あの頃私は若くて素行が悪く、友達に色街に誘われるまま、その金をすっかり使い果たしてしまいました。そのとき貴方は遠くにいらっしゃって、私をどうすることも出来ませんでした。その年に私は病死したのですが、あの世ではつきりとお見通しで、貴方のために負債を取り立てられること甚だ急でありました。平等王（閻魔）様が私に仰るには、『お前は現世で彼の錢を償うべきである。もし再び人間の身体にして成長するのを待つとしたら、とても間に合わぬ。しばらく畜生の身となすべきである。そうすれば十数年かけて償うことができよう』と。私はそこで畜生道に駆り立てられ、知らぬ間に江陵の群馬の中に生まれ落ちておりました。これが馬となった私の今の姿です。

【校記】 2

① 「賀蘭坊玄小家」、伝奇輯校本は「賀蘭方玄小字」に作り、校記および按語に「方」原譌作「坊」、「字」原譌作「家」、據『勸善書』改。按、賀蘭、複姓」という。これに従うべきかと思われるが、一先ず『太平広記』諸本の原文に拠っておく。

② 「時」、会校本校記に「沈本無此字」とある。

③ 「間」、四庫本は「問」に作る。会校本・伝奇輯校本には指摘なし。

④ 「十數年」、伝奇輯校本は「四五年」に作り、校記および按語に「原作「十數年」、據『勸善書』改。按、據下文、通児爲馬償債爲期

五年、作「十數年」誤。「四五年」及下文「五六年」皆約數」という。これなら下文と年数が合うが、ただ『太平広記』諸本に異同がないところからすると、『勸善書』が年数の齟齬に気付いて改めたものではないだろうか。また仮に「十數年」が誤りであるとすれば、むしろ「十」が衍字である可能性を考えてよいであろう。ただ私見では、「十數年」でも矛盾なく読むことが出来るように思う（その理由については【注】2「十數年」および【注】3「七千」を参照）。ここは『太平広記』諸本の原文に従って改めずにおく。

⑤ 「在」、会校本は「生」に作り、校記に「原作「在」。現據沈本改」という。伝奇輯校は「在」に作り、校記に「明鈔本・『勸善書』作「生」、『會校』據明鈔本改」という。

【注】 2

○親表甥 「表甥」は母方のいとこの子。牛志平・姚兆女『唐人称谓』を参照（二二四頁）。「親」字を付した用例が見当たらないが、「親姪（血縁の近い甥、実の甥）」と同様、血縁が最も近いこと、身近な間柄を示すものであろう。また現代中国語の「親弟々」「親妹々」などが、「実の弟」「実の妹」の意味で使われることから類推すると、「実際の」という強調のニュアンスを添えているとも考えられる。

○常州 州名。現在の江蘇省常州市一帯。省の南部に位置する。唐・李吉甫『元和郡県図志』卷二六・江南道一、『旧唐書』卷四〇・地理志三・江南東道、『新唐書』卷四一・地理志五・江南東道などに記載がある。

○無錫 県名。現在の江蘇省無錫市。太湖の北岸に位置する。常州

の属県の一つで、上記『元和郡県図志』『旧唐書』『新唐書』の常州の項には、管轄する県のうちに無錫の名が見える。

○賀蘭坊玄小家 難読の箇所て義不詳。『太平広記』諸本の原文通りであれば、「賀蘭坊」は無錫の坊(方形に区切られた街区、まち)の名、「玄小家」は玄小の家ということになるうが、読解の参考となる資料が他に見当たらない。【校記】2—①に述べたように伝奇輯校本は『勸善書』によって「賀蘭方玄小字」に改める。これならば「賀蘭方玄」という者で、小字(幼名)を……となつて意味の通りがよく、後文の「其所言表甥姓字、……一無所差(其の言ふ所の表甥の姓字、……一として差^{たが}ふ所なし)」とも対応する。

○通兒 人名。本話に見えるのみ。幼名のような印象を与えるところから、『勸善書』は「小家」を「小字」に改めたのであろう。

○不省 振り返つてみて気づかれませんか。御記憶ではありませんか。「省」は、ふりかえり考える。気づく、さとする。「不省」は「不省記」の略で、記憶していないの意味、ここはそれを問いかける口調と思われる。「省」字については、高木正二「唐詩における助辞「省」の用法について」(『東方学』五、一九五二年)があり、後に動詞句を伴う「不省」についても言及し、「不曾」と同じ副詞的用法とする。ただ本話の場合は、やはり動詞と取るべきであろう。

○貞元 唐の徳宗の年号(七八五〜八〇九年)。十二年は、西暦七九六年。『河東記』で「貞元」の年号が見えるのは、他に02「蕭洞玄」、08「獨孤遐叔」、09「胡媚兒」、11「盧佩」、16「韓弇」、18「鄭馴」、31「申屠澄」、34「李自良」の八話。

○海陵 県名。現在の江蘇省泰州市海陵區。常州無錫の北にあたる。『旧唐書』卷四〇・地理志三・淮南道・揚州大都督府に「舊領縣四、江都・六合・海陵・高郵(旧領県は四、江都・六合・海陵・高郵なり)」とある。『新唐書』では卷四一・地理志五・江南道。

○別墅 別荘。常用の語で『太平広記』にも頻見される。『河東記』では、18「鄭馴」、24「韋齊休」に見える。

○錢一百貫 「貫」は、錢を通すひも(錢貫、錢緡)のこと。錢差で束ねた銅錢一千文をいう単位。(また「緡」も一千文の単位として用いられる。)『河東記』では、01「黒叟」に「俸錢百萬貫」、07「李敏求」に「得錢二百四十貫」「得錢一千貫」などに見える。なかでも興味深いのは「李敏求」の「得錢一千貫」で、これは敏求の妻の兄宰が別荘を売却し、五人の妹の結婚費用に充てた金額となっている。同話には、「伊氏有五女、其四皆已適人。敏求妻其小者。其兄宰、方貨城南一庄、得錢一千貫、悉將分給五妹爲資裝(伊氏に五女有り、其の四は皆已に人に適ぐ。敏求の妻は其の小なる者なり。其の兄の宰、方に城南一庄を貨り、錢一千貫を得、悉く將て五妹に分給して資裝と爲さんとす)」とあり、十倍の値段である。建物や敷地の規模等、いずれも不明で単純な比較は出来ないが、都長安の城南と揚州海陵では、別荘の価格に大きな差があったと思われる。『河東記』から窺われる貨幣価値については、本訳注稿(六)の「第六話 呂群」の【参考】「下僕の値段」を参照(『名古屋大学中国語学文学論集』第三二輯、二〇一九年、九〇〜八八頁)。

なお「錢一百貫」は、『太平広記』では卷三二九・鬼一四「王湛」

に「冥司判云、殺人之罪、身後科罰。取錢一百貫、當折四年祿（冥司の判に云ふ、「殺人の罪は、身後に罰を科す。錢一百貫を取るは、當に四年の祿を折るべし」と）と見える（出典は唐・張鷟『朝野僉載』）。この話は、人の金百貫を奪い口封じに殺害した過去を持つ荊州当陽の県令王玄式が、五度の銓衡試験に通らなかったため、その訳を甥の王湛（彼は冥府の事情を知る能力を持っていた）に尋ねたというもの。上記の引用は、翌日に王湛が玄式に伝えた冥府の裁判官の判決で、錢一百貫は俸給の差額四年分ということになるが、これでは貨幣価値のほどは判然としない。因みに張國剛『唐代官制』（隋唐歴史文化叢書・三秦出版社、一九八七年）によれば、県令の俸給の月額は四十貫であった（一七四頁・表七、『唐會要』卷九一・内外官料錢上に基づく）。

○年少 年若い。常用の語で『河東記』では、他に15「馬朝」に一例。
○無行 素行がわるい。『史記』卷九二・淮陰侯列伝に「始爲布衣時、貧無行、不得推擇爲吏（始め布衣爲りし時、貧にして行ひ無く、推択されて吏と爲るを得ず）」とあり、宋・裴駰の集解は「李奇曰、無善行可推舉選擇（李奇曰く、「善行の推挙選択すべき無きなり）」という。常用の語で『太平広記』にも散見される。例えば、卷三〇〇・神一〇「李湜」に「有術者見湜云、君有邪氣、爲書一符。後雖相見、不得相近。二夫人一姓王一姓杜、罵云、酷無行。何以帶符爲（術者の湜を見る有りて云ふ、「君に邪氣有り、爲に一符を書せん」と。後相見ると雖も、相近づくを得ず。二夫人の一は姓王一は姓杜、罵りて云ふ、「酷だ無行なり。何ぞ符を帯びるを

以て爲すや」と）、卷三三四・鬼一九「王玄之」に「女曰、得無相難乎。兒本前高密令女、嫁爲任氏妻。任無行見薄、父母憐念、呼令歸。……（女曰く、「相難きこと無きを得んや。兒は本と前の高密令の女にして、嫁して任氏の妻と爲る。任行ひ無くして薄んぜられ、父母憐念して、呼びて歸らしむ。……）」と（出典は共に唐・戴孚『廣異記』）などある。

○狹邪 いろまち。「狹斜」に同じ。遊里は、狭い横道で通じていたことから言う。『太平広記』にも数例、卷四八四・雜伝記一「李娃傳」には「友曰、此狹邪女李氏宅也（友曰く、「此れ狹邪の女李氏の宅なり。」）」とある（出典は唐・陳翰『異聞集』、同話の撰者は唐・白行簡）。なお「狹斜」は、『太平広記』では卷四五二・狐六「任氏」（唐・沈既濟撰）の一例のみ。

○破用 むだに使う。不適正に使用する。不法に使う。唐・白居易「書事詠懷」に「日遭齋破用、春頼閨加添（日は齋に遭ひて破用し、春は閨に頼りて加添す）」（『全唐詩』卷四五七、『白氏文集』卷三四）とあり、謝思煒『白居易詩集校注』は「破用、支用・占用」と解説して本話を引く（二六二三頁注）。ただ本話の場合は、無駄に使う、不法に使うといったニュアンスが強いであろう。『旧唐書』卷一〇七・玄宗諸子・永王璘伝には、「九月至江陵、召募士將數萬人、恣情補署、江淮租賦、山積於江陵、破用鉅億（九月江陵に至り、士將數万人を召募し、情を恣ままして署に補し、江淮の租賦、江陵に山積し、破用すること鉅億たり）」の用例が見える。『太平広記』では他に二例、卷一一一・報応一〇・觀音經「成珪」に「揚州

所司謂珪盜賣其木。拷掠行夫、不勝楚痛、妄云破用（揚州の所司謂へらく珪其の木を盗売すと。行夫を拷掠するに、楚痛に勝へず、妄りに破用せりと云ふ）」（出典は『卓異記』、明鈔本では唐・戴孚『広異記』。『卓異記』は、唐の李翱あるいは陳翰の撰とされ、唐朝の盛事を記す。話の内容から考えて明鈔本が正しいであろう）、卷一七二・精察部「李德裕」に「及交割之日、不見其金。鞠成具獄、伏罪昭然。然未窮破用之所（交割の日に及び、其の金を見ず。鞠成り獄を具へ、罪に伏すること昭然たり。然るに未だ破用の所を窮めず）」（出典は唐・嚴子休『桂苑叢談』）とある。

○略盡 すべて使い尽くす。「略」は「略不」の場合と同様、「すべて」「みな」の意。『河東記』では、他に06「呂群」に一例。『河東記』訳注稿（六）（『名古屋大学中国語学文学論集』第三二輯、二〇一九年）の「呂群」注（一六頁下段）を参照。

○無奈通兒何 通兒（私）をどうすることもできない。「無奈何」は、どうすることもできない、如何ともしがたい。目的語は「奈何」の間に置かれる。常用の語で、『太平広記』にも十数例。

○冥間 冥土。あの世。常用の語で『太平広記』には二十例近く。『河東記』では、他に24「韋齊休」に用例が見える。

○了了 はっきりしたさま。明らかなさま。晋・張華『博物志』卷二に「漢末關中大亂、有發前漢時冢者、人猶活……問漢時宮中事、説之了了、皆有次序（漢末關中大いに乱れ、前漢の時の冢を発く者有るに、人は猶ほ活く。……漢時の宮中の事を問ふに、之を説くこと了了たりて、皆な次序有り）」とある。これも常用の語で、『太

平広記』には二十例近く。（『博物志』の上記の話も卷三七五・再生一に「漢宮人」と題して収録される。）

○徴債 負債を徴収する。『魏書』卷一一四・釈老志に「徴債之科、一準舊格（徴債の科は、一に旧格に準ず）」。『太平広記』では他に一例、卷一二二・報応二一・冤報「鄆卒」に「唐元和末、王師討平鄆、汴卒有食鄆士之肉者。數歲暴疾、夢其所食卒曰、我無宿憾、既已殺之、又食其肉、何不仁也。我已訴於上帝矣。當還我肉。我亦食之、徴債足矣（唐の元和末、王師鄆を討平す。汴卒に鄆士の肉を食らふ者有り。數歳にして暴かに疾あり、其の食らふ所の卒を夢むるに曰く、「我には宿憾無きに、既已に之を殺し、又た其の肉を食らふは、何ぞ不仁なるや。我已に上帝に訴へたり。當に我が肉を還すべし。我も亦た之を食らばば、徴債足れり」と）」とある（出典は唐・盧肇『逸史』）。

○平等王 冥界で死者の罪業を裁く王の名。公平に生死罪福を掌るところからいう。唐・慧琳『一切経音義』卷五に「梵音爛魔、義翻爲平等王、此司典生死罪福之業（梵音は爛魔、義翻して平等王と爲す、此れ生死罪福の業を司典す）」とある（『大正新脩大藏經』第五四卷・事彙部下、三三八頁下段）。『太平広記』では他に四例、『河東記』では02「蕭洞玄」に用例が見える。もとは閻魔を指したが、唐の蔵川の述と伝えられる『十王經』では、秦広王・初江王・閻羅王らと並んで十人の王の一人に数えられる。中村元ほか編『岩波仏教辞典第二版』（岩波書店、二〇〇二年）によれば、『十王經』は、十王信仰が盛んとなった唐末十世紀頃に成立した偽經とされる（四七七

頁)。九世紀中頃成立の『河東記』の「平等王」がいずれを指すか微妙であるが、古義の閻魔の意味であろうか。

○見世 「現世」に同じ。この世。晋・郗超「奉法要」に「十二門經云、……苟能每事思忍、則悔吝消於見世、福報顯於將來（『十二門經』に云ふ、……苟しくも能く事毎に忍を思へば、則ち悔吝は見世に消へ、福報は将来に顯はれん）」（『弘明集』卷二三、『大正新脩大藏經』第五二卷・史伝部四、八七頁下段～八八頁上段）『太平広記』では他に一例、卷九七・異僧一一「阿足師」に「或有謂曰、阿足賢聖、見世諸佛。何不投告、希其痊除（或るひとの謂ふ有りて曰く、「阿足は賢聖にして、見世の諸仏なり。何ぞ投じて告げ、其の痊除を希はざらんや」と）」とある（出典は唐・薛用弱『集異記』）。

○人身 人間のからだ。人間のすがた。常用の語で『太平広記』にも頻出。『河東記』では28「崔紹」に「領一婦人來、兼領二子。皆人身而猫首（一婦人を領して來り、兼ねて二子を領す。皆な人身にして猫首なり）」、「見四人、皆人身而魚首（四人を見るに、皆な人身にして魚首なり）」とある。

○長大 大きくなる。成長する。これも常用の語で『太平広記』にも頻出。なお『河東記』では27「許琛」に「復有一紫衣人、身長大、黑色（復た一紫衣の人有り、身長長大にして、黑色なり）」とあるが、身の丈が大きいことを言っており、意味が異なる。

○十數年 この年数については、【校記】2—④で触れたように、伝奇輯校本は「四五年」と改める。ただ、『太平広記』諸本の原文通りに、判決は馬に転生しての十数年の力役と読んで、それが何ら

かの理由で短くされ（あるいは「銜鑿の失」なく従順に勤めたことを斟酌しての恩赦であろうか）、代わりに不足分を金銭で支払うことになったと考えることも出来るのではないだろうか。【注】3「七十千」を参照。

○畜生道 仏教思想の「六道輪廻」の一つ。畜生に生まれ変わって、苦しみを受ける世界。唐・道世『法苑珠林』卷九・六道篇第四之三・鬼神部・業因に「如智度論說、……或復慳貪積財不施、皆生鬼道、從鬼命終、多生畜生道中（智度論に説くが如く、……或いは復た慳貪にして財を積みて施さざれば、皆な鬼道に生まれ、鬼命の終はりて従りは、多く畜生道中に生まる）」とある。

【原文】 3

阿馬在丈人槽檻、于茲五六年。其心省^①然、常與丈人償債。所以竭盡^②驚蹇、不敢居有過之地。亦知丈人憐愛^③至厚。阿馬非無戀主之心。然記^④傭五年、馬畜生^⑤之壽已盡。後五日、當發黑汗而死。請丈人速將阿馬貨賣。明日午時、丈人自乘阿馬出東柵門、至市西北角赤板門邊、當有一胡軍將。問丈人買此馬^⑥者、丈人但索十萬。其人必酬七十千。便可速就之。言事訖、又曰、兼有一篇、留別丈人。乃驤^⑦首朗吟曰、既食丈人粟、又飽丈人芻。今日相償了、永離三惡途。遂奮迅數遍、嘶鳴訖草如初。傳素更與之言、終不復語。其所言表甥姓字、盜用錢數年月、一無所差。傳素深^⑧感其事。

【訓読】 3

阿馬は丈人の槽檻に在りて、茲^ミに于いて五六年なり。其の心は省

然たりて、常に丈人の与に債を償はんとす。所以に驚蹇を竭尽して、敢へて過ち有るの地に居らず。亦た丈人の憐愛せらるること至厚なるを知る。阿馬は主を恋ふるの心無きに非ず。然れども傭を記すること五年にして、馬畜生の寿は已に尽きたり。後五日、当に黒汗を発して死せん。請ふらくは丈人速やかに阿馬を將て貨売せんことを。明日の午時、丈人自ら阿馬に乗りて東柵門を出で、市の西北角の赤板門の辺に至らば、当に一胡軍將有るべし。丈人に此の馬を買はんことを問はば、丈人は但だ十万を索めよ。其の人必ず七十千を酬いん。便ち速やかに之を就すべし」と。言事訖りて、又曰く、「兼ねて一篇あり、丈人に留別せん」と。乃ち首を驤げて朗吟して曰く、「既に丈人の粟を食み、又丈人の芻に飽く。今日相償ひ了れり、永く三惡の途を離れん」と。遂に奮迅すること数遍、嘶鳴して草を齧むこと初めの如し。伝素更に之と言はんとするも、終に復びは語らず。其の言ふ所の表甥の姓字、盗用の錢数年月は、一として差ふ所なければ、伝素深く其の事に感ず。

【訳】 3

私は貴方の馬屋に住むことになって、これまで五六年になります、心の中ははっきり目覚めた状態で、いつも貴方のために負債を償おうと思っています。それゆえ驚馬のわずかな力を傾け尽くして働き、過ちを犯すようなことは致しておりません。また貴方が私を可愛がって下さるお気持ち甚だ厚いことも、存じております。私に主人を恋慕う心がないわけではございません。ですが傭われて五年になり、家畜の馬としての寿命はすでに尽きました。もう五日

すると、黒い汗を流して死ぬでしょう。考えますに、貴方は早く私を売り物になさって下さい。明日の正午頃、貴方が御自分で私に乗って東柵門をお出になり、市の西北角の赤い板門あたりに差しかけられると、きっと一人の胡人の軍將が現れることでしょう。彼が私を買いたいと持ちかけてきたら、ただ十万の金をお求めなさい。その人は必ず七万を支払うでしょう。そうなたらすぐに話をお決めなさい」と。そして話が終わると、さらに「あわせて詩が一首ございます、留め置いてお別れのしるしと致しましょう」と言い、首を挙げて声高く「丈人の穀物をいただき、丈人の秣も充分にいただいた。償いを終えた今日、永久に三惡の道を離れよう」と詠った。そして奮い立つように数度身震いすると、普段通りに嘶いて草を齧った。伝素はさらに馬と言葉を交わそうとしたが、とうとう二度とは話さなかった。しかし馬の言った甥の名前、盗んで使った金の額、その年月は一つとして食い違ふところが無かったので、伝素はそのことに深く感じ入った。

【校記】 3

- ①「省」、伝奇輯校本校記に『勸善書』作「醒」とある。
- ②「盡」、許本は誤って「書」に作る。会校本・伝奇輯校本は指摘せず。
- ③「愛」、伝奇輯校本校記に『勸善書』作「哀」とあり、按語に『呂氏春秋』慎大覽・報更「人主胡可以不務哀士」の高誘注「哀、愛也」を引く。

④「記」、会校本は「計」に作り、校記に「原作「記」。現據沈本改」という。伝奇輯校本も「計」に作り、校記に「原作「記」、據明鈔本・

『勸善書』改」という。

⑤ 「馬畜生」、会校本は「畜生」に作り、校記に「原作「馬畜生」。現據孫本・沈本改」という。伝奇輯校本は「馬畜生」に作り、「馬」字について校記に「明鈔本・孫校本無此字、『會校』據刪。『勸善書』作「而」という。

⑥ 「買此馬」、底本注に「買原作賣。據明鈔本改」とある。会校本も「買此馬」に作り、校記に「原作「賣此馬者」。現據沈本・陳本改」という。伝奇輯校本も「買此馬」に作り、校記なし。

⑦ 「驤」、会校本校記に「沈本作「翹」とある。

⑧ 「深」、会校本は「徵」に作り、校記なし。伝奇輯校本は「深」に作り、校記なし。底本・談本・許本・黄本・四庫本・筆記本いずれも「深」に作る。会校本の誤植であろう。

【注】 3

○省然 はっきりしたさま。明らかさま。覚醒しているさま。『太平広記』では他に二例、卷三五八・神魂一「裴珙」に「囊韃者令其閉目、自後推之、省然而蘇（囊韃の者其をして目を閉ざさしめ、後ろ自り之を推すに、省然として蘇る）」（出典は唐・薛用弱『集異記』）、卷四一九・龍二「柳毅」に「指顧之際、山與舟相逼、乃有彩船自山馳來、迎問於暇。其中有一人呼之曰、柳公來候耳。暇省然記之（指顧の際、山は舟と相逼り、乃ち彩船の山自り馳せ来る有りて、暇を迎問す。其の中に一人の之を呼ぶ有りて曰く、「柳公来り候するのみ」と。暇は省然として之を記す）」（出典は唐・陳翰『異聞集』、同話の撰者は唐・李朝威）とある。なお、この語は先の『集異記』「裴

珙」の用例が最も早いようで、唐代以前の用例が他に見当たらない。

○償債 負債をつぐなう。借金を返す。『漢書』卷二四上・食貨志上に「於是有賣田宅鬻子孫以償債者矣（是に於いて田宅を売り子孫を鬻ぎて以て償債する者有り）」。仏教では、前世の悪業を償い清算するために、今世で不幸な目にあう意味で用いられる。『太平広記』にも十数例、本話と同様に家畜となって償う話を集めた卷一三四・報応三三・宿業畜生では、「宜城民」（出典は唐・道世『法苑珠林』）、「李信」（出典は唐・郎余令『冥報拾遺』）、「李明府」（出典は後唐・王穀『報応録』）、「上公」（出典は後周・王仁裕『玉堂閒話』）に用例が見える。また同書の畜獸部にもこうした話は多く、卷四三四・畜獸一・牛償債の「下士瑜」（出典は『法苑珠林』）、卷四三六・畜獸三・馬の「韋有柔」（出典は唐・戴孚『広異記』）、卷四三六・畜獸三・驢の「王甲」（出典は『法苑珠林』）にも「償債」の語が見える。なお『正統道蔵』では、前世の悪業を償う意味での用例が意外に見当たらず、撰者・成立年代共に不詳の『太上中道妙法蓮華經』（統道蔵・杜）の卷一に「若作惡道、業因自現、……或作猪狗汚賤之苦、或作驢騾償債之苦、……（若し惡道を作さば、業因自ら現はれ、……或いは猪狗汚賤の苦を作し、或いは驢騾償債の苦を作し、……）」とある一例のみ。ただ、仏教の償債思想が道教にも受容され影響を及ぼしていたことを、この資料は示している。唐詩では、寒山「詩三百三首」の第二三五首「三界人蠢蠢、……」に、「不知自償債、卻笑牛牽磨（自ら償債するを知らず、却って笑ふ牛の磨を牽くを）」とある（『全唐詩』卷八〇六）。

○**竭盡** 出しつくす。「竭」は、限界まですべてを出しつくす。『後漢書』卷五二・崔駰伝に「葬訖、資産竭盡、因窮困（葬訖り、資産竭尽し、因りて窮困す）」。『太平広記』では他に一例、卷四五四・狐部「計眞」に「一女子血誠、自謂竭盡。今日求去（一女子の血誠、自ら謂へらく竭尽すと。今日去らんことを求む）」とある（出典は唐・張説『宣室志』）。

○**驚蹇** のろい馬。転じて能力が低いたとえ。後漢・班彪「王命論」に「是故驚蹇之乘、不騁千里之塗（是の故に驚蹇の乗は、千里の塗を騁せず）」とある（『文選』卷五二）。『太平広記』では他に一例、卷一六六・氣義部「吳保安」に「專策驚蹇、以望招攜（専ら驚蹇に策うち、以て招携を望む）」（出典は唐・牛肅『紀聞』）。

○**不敢居有過之地** あやまちを犯すようなところには、敢えて足を踏み入れない。魏・呉質「答魏太子牋」（『文選』卷四〇）に「但欲保身救行、不蹈有過之地、以爲知己之纍耳（但だ身を保ち行ひを^{いまし}勅め、有過の地を踏んで、以て知己の累と為らざらんことを欲するのみ）」とある。

○**憐愛** いくしむ。かわいがる。『史記』卷四三・趙世家に「左師公曰、老臣賤息舒祺最少、不肖。而臣衰、竊憐愛之。……（左師公曰く、「老臣の賤息舒祺は最も少くして、不肖なり。而して臣衰へ、窃かに之を憐愛す。……」と）。常用の語で『太平広記』には十例ほど。卷一九四・豪俠二「聶隱娘」に「後遇夜即失蹤、及明而返。鋒已不敢詰之、因茲亦不甚憐愛（後夜に遇へば即ち踪を失ひ、明に及びて返る。鋒已に敢へて之を詰はず、茲に因りて亦た甚だ

しくは憐愛せず）」（出典は唐・裴鉞『傳奇』、卷四三七・畜獸四・犬上「鄭韶」に「韶養一犬、憐愛過子（韶一犬を養ひ、憐愛すること子に過ぐ）」（出典は唐・薛用弱『集異記』）などがある。

○**戀主** 主人を慕う。魏・曹植「上責躬詩表」に「僻處西館、未奉闕庭、踊躍之懷、瞻望反側、不勝犬馬戀主之情（西館に僻處し、未だ闕庭に奉ぜず、踊躍の懷ひ、瞻望反側し、犬馬恋主の情に勝へず）」（『文選』卷二〇、『曹子建集』卷七）。『太平広記』では他に一例、卷二七・神仙二七「唐若山」に「扶桑在望、蓬島非遙、遐瞻帝閭、不勝犬馬戀主之至（扶桑望に在り、蓬島遙かなるに非ざるも、^{とほ}遐く帝閭を瞻て、犬馬恋主の至りに勝へず）」とある（出典は前蜀・杜光庭『仙伝拾遺』）。「戀主之心」では、唐・白居易「爲段相謝借飛龍馬狀」に「執鞭拜命、借馬喻身、取其戀主之心、以表爲臣之節。恩深易感、情懇難陳（鞭を執りて命を拝し、馬を借りて身に喻へ、其の恋主の心を取りて、以て臣爲るの節を表はさん。恩は深くして感じ易く、情は懇ろにして陳べ難し）」（『全唐文』卷六六九、『白氏文集』卷六一）。「犬馬戀主」は後世、成語的に用いられるようである。

○**記備** 「記」は、記憶する。回想する、思い出す。「備」は、賃金のために働く、やとわれる。（償いとして）働いたことを振り返ってみると、の意であろうが、「記備」の語は他に用例が見当たらない。会校本・伝奇輯校本のように、明鈔本（沈本）に従って「計備」と改めるべきかと思われるが、一先ず底本に従った。

なお「記備五年」は、前文の「阿馬在丈人槽檻、于茲五六年」と年数が多少食い違う。概数と見れば気にする必要もなからうが、あ

るいは甚だ「蹇劣」であったこの馬は、騎乗用に使えるまでに暫く時間がかかったということであろうか。

○黒汗 黒い汗。馬の病名のうちに「黒汗」があり、本草・医学関係の書籍にしばしば取り上げられている。北魏・賈思勰『齊民要術』卷六の「養牛馬驢騾第五十六」にも、「治馬黒汗方（馬の黒汗を治するの方）」として治療法が述べられている。『太平広記』では他にもう一例、卷二九〇・妖妄三「又諸葛殷」に「後駢有所愛馬死。園人懼得罪、求救於用之。用之乃又見駢曰、隋將陳杲仁、用之有事命至淮東。杲仁訴以無馬、令公大烏、望一借。頃刻、廐吏報云、大烏黒汗發。駢徐應之曰、吾已借大司徒矣。俄而告斃（後に駢に愛する所の馬の死する有り。園人罪を得んことを懼れ、救ひを用之に求む。用之乃ち又た駢に見へて曰く、「隋將の陳杲仁、用之事有りて命じて淮東に至らしむ。杲仁訴ふるに馬無きを以てすれば、公の大烏をして、一借せしめんことを望む」と。頃刻にして、廐吏報じて云ふ、「大烏黒汗発す」と。駢徐ろに之に応じて曰く、「吾已に大司徒に借せり」と。俄かにして斃るを告ぐ）」とある（出典は唐・羅隱『妖乱志（広陵妖乱志）』）。黒い汗をかいて死ぬ馬の病気のこととは、当時よく知られていたであろう。

○貨賣 売出す。売る。『宋書』卷九一・孝義・郭原平伝に「乃歩從他道往錢唐貨賣（乃ち歩みて他道從り錢唐に往きて貨売す）。『太平広記』では他に三例、卷一二六・報応二五「崔進思」には、「家資田園、貨賣並盡（家資田園は、貨売して並びに尽く）」とある（出典の記載なし）。

○東棚門 東の粗末な造りの門。あるいは街東の門の通称か。「棚門」については、用例が見当たらず、管見では僅かに唐・慧琳『一切経音義』卷六三・根本説一切有部大苾芻戒律經一卷の項に「棚上……廣雅云、棚門也。聲類云、棚榭也。説文云、棧也。從木朋声（棚上、……廣雅に云ふ、「棚門なり」と。声類に云ふ、「棚榭なり」と。説文に云ふ、「棧なり。木に従ふ朋声」と）」と見えるのみ（『大正新脩大藏經』第五四卷・事彙部下・七三〇頁中段）。ただ、この資料では具体性に欠け、どのような門なのか不明。「棚」は、屋根だけで周囲の壁がない仮設の小屋、あるいは粗末な小屋を言い、ここからすると立派な門でないことは確かであろう。

○赤板門 赤く塗られた板の小門。あるいはこれも通称か。「板門」は、大門の手前にある小門。『太平広記』では他に三例、うち卷四二・神仙四二「賀知章」には、「賀知章、西京宣平坊有宅、對門有小板門（賀知章、西京の宣平坊に宅を有し、門に対して小板門有り）」（出典は唐・皇甫氏『原化記』）、卷一九三・豪俠一「虬髯客」には「俄即到京、與張氏同往。乃一小板門、扣之、有應者拜曰、三郎令候一娘子李郎久矣。延入重門。門益壯麗（俄かにして即ち京に到り、張氏と共に往く。乃ち一小板門ありて、之を扣けば、応ずる者有りて拜して曰く、「三郎一娘子と李郎とを候たしむること久し」と。延きて重門に入る。門は益ます壯麗なり）」（出典は唐・裴鉞『虬髯傳』）とあって、板門と大門の配置がよく分かる。もう一例は『河東記』の05「韋丹」で、「食頃、而有應門者開門延入。數十歩、入一板門。又十餘歩、乃見大門（食頃にして、門に應ずる者有りて門

を開きて延き入る。数十歩にして、一板門に入る。又十余歩にして、乃ち大門を見る」とあり、「虬髯客」の描写とよく似ている。

○胡軍將 「胡」は、西域の異民族。「軍將」は、軍をひきいる將。

『周礼』夏官・序官に「凡制軍、萬有二千五百人爲軍、王六軍、大國三軍、次國二軍、小國一軍、軍將皆命卿（凡そ軍を制するに、萬有二千五百人を軍と爲し、王は六軍、大國は三軍、次國は二軍、小國は一軍、軍將は皆な卿に命ず）。唐代では、節度使などの配下の部將を指して用いられる。唐・白居易「武寧軍軍將郭暈等五十八人加大夫賓客詹事太常卿殿中監制」に「勅、某官某等。頃以齊寇發狂、王師致討。武寧裨將五十八人、雖有元戎、指蹤制勝、實由衆校、同心許國、合力成功（勅す、某官某等に。頃、齊寇狂を發するを以て、王師討を致す。武寧の裨將五十八人、元戎有りて、指蹤して勝を制すると雖も、實に衆校に由り、心を同じうして國に許げ、力を合はせて功を成せり）」とあり（『全唐文』卷六五八、『白氏文集』卷五二）、「軍將郭暈等五十八人」を本文では「武寧裨將五十八人」と言い換えている。「軍將」は、裨將、つまり節度使の副將ということになる。白居易には「夏州軍將二人授侍御史制」（『全唐文』卷六五八、『白氏文集』卷五二）「武寧軍將王昌涉等授官制」（『全唐文』卷六五九、『白氏文集』卷五二）「魏博軍將薛之縱等十四人各授官爵制」（『全唐文』卷六六二、『白氏文集』卷四八）など、他にも軍將に官爵を授ける旨の制誥が見え、ここから推し量って軍府中では相應の地位にあったと考えられる。『太平広記』にも頻見されるが、卷一〇八・報応七・金剛經「兗州軍將」には、「乾符中、兗州節度

使崔尚書、法令嚴峻。嘗有一軍將衙參不到。崔大怒、令就衙門處斬（乾符中、兗州節度使の崔尚書は、法令嚴峻なり。嘗て一軍將の衙參に到らざる有り。崔大いに怒り、衙門に就きて斬に処さしむ）」とある（出典は唐・盧求『報応記（金剛經報応記）』）。この話では、軍將は中央への上申もなく崔尚書の一存で即刻死罪に処されているように、節度使の私兵的性格が強く、『周礼』にいう「軍將」とはかなり異なる。

○七十千 七万錢。千錢を一緡とし、その七十倍。錢一千文を数える単位としては、【注】2「錢一百貫」でも触れた「貫」「緡」があるが、この「……十千」も一般的で『太平広記』に頻出する。「七十千」は、卷一五一・定数六「孟君」に「郎君更十日、合處重職。俸入七十千錢、何得言貧賤（郎君更に十日にして、合に重職に処らん。俸入は七十千錢なれば、何ぞ貧賤と言ふを得ん）」、「數日授官、月俸正七十千（數日にして官を授かり、月俸は正に七十千なりき）」とある（出典は唐・盧肇『逸史』）。職名は明らかでないが、重職の月俸と同額ということで、馬の高価さが推し測られよう。

この「七十千（七十貫）」の売値は、【注】2「十數年」で述べたように、転生して十數年かけて償債する筈が、馬としての寿命が短くなったため、その不足分を金錢に換算した額と考えることができる。十數年（仮に十五、六年とする）の力役が別荘の代金百貫相当だとして計算すると、前文に言う「記傭五年」で償債した額は三分の一前後となり、なお七十貫近くの不足が残ることになる。この不足額を死ぬ前に身売りすることによって清算しようとしたのである。

る。因みに動物に転生して償債する話で、力役のみでなく金銭が加わる話には、本話と同じ巻四三六所収の「張高」（出典は唐・李復言『続玄怪録』、および「東市人」（出典は唐・段成式『酉陽雜俎』）がある。（ただしこれらの話の場合、力役は力役、金銭は金銭とそれぞれ別勘定で償うことになっている。）いま後者の話を挙げると、或る人が父の葬儀の準備のためロバに乗って出かけたところ、ロバが急に人語して償債の方法について語ったというもので、本話と似たところがある。ロバの語る台詞は、「我姓白名元通、負君家力已足、勿復騎我。南市賣麴家、欠我錢五千四百文、我又負君錢數、亦如之。今可賣我（我姓は白にして名は元通、君が家の力を負ふことと已に足れり、復びは我に騎ること勿れ。南市の麴を売る家は、我に錢五千四百文を欠き、我も又た君に錢數を負ふこと、亦た之の如し。今我を売るべし）」である。

○留別 旅立つ人が詩文を書き残す。詩題に頻用の語で、『太平広記』にも散見される。

○驤首 首をあげる。『漢書』卷五一・鄒陽伝に「臣聞交龍驤首奮翼、則浮雲出流、霧雨咸集（臣聞く、交龍首を驤げ翼を奮へば、則ち浮雲出流し、霧雨咸な集まる、と）。また唐・杜甫「贈別賀蘭鈺」に「老驤倦驤首、蒼鷹愁易馴（老驤首を驤ぐるに倦み、蒼鷹馴れ易きを愁ふ）」（『全唐詩』卷二二〇、『杜詩詳注』卷一一一）。『太平広記』では他に二例、卷一三九・微応部「梁武帝」に「梁武帝大同元年、幸玄武湖、湖中魚皆驤首、見於水上、若顧望焉（梁の武帝の大同元年、玄武湖に幸するに、湖中の魚皆な首を驤げて、水上に見^{あらは}れ、顧望

するが若し）」（出典は唐・竇維瑤『広古今五行記』、卷四六八・水族部「顧保宗」に「其中有大白魚、長百餘丈、驤首四望、移時乃没（其の中に大白魚有り、長さ百余丈、首を驤首げて四望し、時を移して乃ち没す）」（出典は『九江記』）とある。『九江記』については、宋・施元之『施注蘇詩』卷二一「同王勝之游蔣山」の注に「庾仲雍九江記」と見えるも詳細不明。

○朗吟 声高く詩歌を吟詠する。朗詠。常用の語で『太平広記』にも十余例。

○粟 粳穀のついたままの穀物。穀物の総称。食物。『河東記』では、09「胡媚兒」に「大如粟粒（大いさ粟粒の如し）」とある。

○芻 まぐさ。

○三惡 仏教思想で、悪行をした者が、死後生まれかわる六道輪廻のうちの三つの道。三惡趣、三途ともいう。地獄道・餓鬼道・畜生道。晋・瞿曇僧伽提婆訳『増一阿含経』卷六・利養品第十三に「或有衆生、身行惡、口行惡、心行惡、誹謗賢聖、邪見造邪見行、身壞命終、生三惡道、趣泥犁中（或いは衆生の、身に悪を行ひ、口に悪を行ひ、心に悪を行ひ、賢聖を誹謗し、邪見して邪見の行を造^{はじ}むる有らば、身壞れ命終はりて、三惡道に生まれ、泥犁中に趣かん）」とある（『大正新脩大藏経』第二卷・阿含部下、五七四頁中段）。

○奮迅 はげしく奮い立つ。『後漢書』卷五一・耿純伝に「遭風雲之時、奮迅拔起（風雲の時に遭ひ、奮迅して拔起す）。『太平広記』には十余例、虎や獅子・龍など動物が奮い立つ様子を表現することが多い。本話と同様な動物に転生した人物の描写では、卷一三四・報応

三三・宿業畜生「劉自然」に「驢遂飲酒數升、啖肉數臠。食畢、奮迅長鳴、淚下數行（驢遂に酒を飲むこと數升、肉數臠を啖ふ。食畢りて、奮迅長鳴し、涙下ること數行なり）」とある（出典は後蜀・周珉『愷戒錄』）。

○嘶鳴 長く声を引いていなく。晋・干宝『搜神記』卷三に、郭璞が死馬を術で生き返らせた話が載り、「馬即能起、奮迅嘶鳴、飲食如常（馬即ち能く起き、奮迅嘶鳴して、飲食すること常の如し）」とある。この話は、『晋書』卷七二・郭璞伝にも引かれる。『太平広記』にも十例ほどが見える。

○齕草 草をかむ。『莊子』外篇・馬蹄第九に「馬蹄可以踐霜雪、毛可以禦風寒、齕草飲水翹足而陸、此馬之眞性也（馬蹄は以て霜雪を踐むべく、毛は以て風寒を禦ぐべし。草を齕み水を飲み足を翹げて陸ぬ、此れ馬の眞性なり）」。『太平広記』には他に三例、うち一例は『河東記』の17「韋浦」である。

○盗用 盗んで使う。常用の語であるが、『太平広記』では他に一例のみ。卷二五二・談諧八「吳堯卿」に「僭竊朱紫、塵汚官省、三數年間、盗用鹽鐵錢六十萬緡（僭かに朱紫を窃み、官省を塵汚し、三數年間に、塩鉄の錢六十萬緡を盗用す）」とある（出典は唐・羅隱『妖乱志（広陵妖乱志）』）。

○一無所差 一つとして食い違ふところがなかった。「差」は、くいちがう。誤る。「一無所……」は常用の語で、『太平広記』にも頻見される。卷八六・異人六「建州狂僧」には、「安置人數、一無所差（安置の人数は、一として差ふところ無し）」とある（出典は南唐・

徐鉉『稽神錄』）。『河東記』では、08「獨孤遐叔」および09「胡媚兒」に「一無所有」の語が見える。

○深感其事 そのことに深く感じ入る。『太平広記』卷一五〇・定数五「李泌」に「肅宗深感其事、因曰、天下之事、皆前定矣（肅宗深く其の事に感じ、因りて曰く、「天下の事は、皆な前に定まれり」と）」とある（出典は五代・闕名撰『感定錄』）。

【原文】 4

明日、試乘至市角、果有胡軍將「將軍」^①。懇求市。傳素微^②驗之、因賤其估^③六十緡。軍將曰、郎君此馬、直七十千已上。請以^④七十千市之。亦不以試水草也。傳素載其緡歸。四日、復過其家、見胡^⑤軍將曰、嘻、七十緡馬^⑥。夜^⑦來飽^⑧發黑汗斃矣。出河東記。

【訓読】 4

明日、試みに乗りて市の角に至るに、果たして胡將軍の懇ろに市はんことを求むる有り。伝素之を微驗して、因りて其の估^{あたひ}を六十緡に賤^{ひく}くす。軍將曰く、「郎君の此の馬は、直^{あたひ}七十千已上なり。請ふ七十千を以て之を市はんことを」と。亦た水草を試すを以てせざるなり。伝素其の緡を載せて帰る。四日にして復た其の家を過ぎ、胡軍將を見るに曰く、「嘻^{あゝ}、七十緡の馬は夜来に黒汗を飽発して斃^{たふ}れり」と。河東記に出づ。

【訳】 4

翌日、試しに騎乗して市場の角を通りかかると、はたして胡人の軍將が現われ、ぜひその馬を譲ってほしいと言った。伝素が一寸確

かめてみようと思ふ段を安くして六万というと、彼は「貴公のこの馬は、七万以上の価値がある。どうか七万で売っていただきたい」といい、水や草を与えて試すこともしなかった。そこで伝素は代金の緡銭を運んで帰った。四日後、その軍将の家を通りかかると、彼がいてこう言った、「ああ、七万で買ったあの馬じゃが、昨夜どっと黒い汗をかいて死んでしまいましたと。」と。『河東記』に出る。

【校記】 4

①「軍將」、底本は「將軍」に作る。会校本は「軍將」に作り、校記に「原作「將軍」」。現據孫本・沈本改」という。伝奇輯校本も「軍將」に作り、校記に「原作「將軍」」。據明鈔本・陳校本・『勸善書』改」という。これに従う。

②「微」、会校本は「微」に作り、校記に「原作「微」」。現據孫本・沈本・陳本改」という。伝奇輯校本も「微」に作り、校記に「原作「微」」。據明鈔本・孫校本・陳校本・『廣豔異編』卷一九「盧從事」改」という。ただ「微驗」の語も『史記』などに見え、この場面での使用に相応しいように思われる（注参照）。ここは底本のままとする。

③「估」、底本注に「明鈔本估作直索」、会校本校記に「沈本作「直索」とある。伝奇輯校本校記も「明鈔本作「直索」、「索」連下讀」という。また伝奇輯校本は「估曰」に作り、校記に「此字原無、據『勸善書』補」という。

④「以」、会校本は「更」に作り、校記に「原作「以」」。現據沈本・陳本改」という。伝奇輯校本は「以」に作り、校記に「明鈔本・

陳校本作「更」、『會校』據改。『勸善書』作「俟」という。（なお同校記は、「明鈔本・陳校本作「更」」を誤って二度繰り返している。）

⑤「胡」、底本注に「胡原作故。據明鈔本改」とある。会校本も「胡」に作り、校記に「原作「故」」。現據沈本・陳本改」という。伝奇輯校本も「胡」に作り、校記なし。談本・許本・黄本は「故」、四庫本・筆記本は「胡」に作る。

⑥「馬」、底本注に「馬字原闕。據明鈔本補」とある。会校本は「馬」字を欠き、校記なし。伝奇輯校本は「馬」字を補い、校記なし。談本・許本・黄本・四庫本は「馬」字を欠き、筆記本のみ「馬」を補う。

⑦「夜」、筆記本は誤って「夜」一字を欠く。

⑧「飽」、会校本は「暴」に作り、校記に「原作「飽」」。現據沈本改」という。伝奇輯校本も「暴」に作り、校記に「原作「飽」」。據明鈔本・『勸善書』改」という。これに従うべきかとも思われるが、一先ず底本に従う。

【注】 4

○懇求 真心をこめてたのみこむ。常用の語で『太平広記』には十例ほど、卷六・神仙六「周隱遙」、卷二七・神仙二七「唐若山」、卷三五・神仙三五「成真人」には、「懇求歸山（懇ろに山に帰らんことを求む）」の語が見える（出典はいずれも前蜀・杜光庭『仙伝拾遺』）。なお、この語は唐代以降に汎用されるようになったようで、『全唐文』には十数例が見えるが、六朝以前の用例が見当たらない。嚴可均『全

上古三代秦漢三國六朝文』は『全漢文』巻八に漢・成帝「答趙皇后」を収め、文末の一節に「有懇求上、無煩牋奏。口授宮使可矣（上に懇求する有れば、牋奏を煩はす無かれ。宮使に口授すれば可なり）」とあるものの、出典を宋・秦醇の『趙飛燕別伝』としており、信憑性に欠ける。

○市 買う。売る。商う。『河東記』では、他に14「王錡」、19「成叔弁」、27「許琛」にこの意味での用例が見える。

○微驗 内密に調べる。それとなく秘かに試してみる。『史記』巻九一・黥布列伝に「相國曰、布不宜有此、恐仇怨妄誣之。請繫赫、使人微驗淮南王（相國曰く、「布には宜しく此れ有るべからず。恐らくは仇怨の之を妄誣せるならん。請ふ赫を繫ぎ、人をして淮南王を微驗せしめんことを」と）」とある。『太平広記』では本話のみ。

○賤其估 その値段を安くする。「估」は、品物の売価。あたい。「賤估」は意外に用例が少なく『太平広記』には僅か二例、もう一例も『河東記』で、10「板橋三娘子」に「往來公私車乗、有不逮者、輒賤其估以濟之（往來の公私の車乗に、逮ばざる者有れば、輒ち其の估を賤くして以て之を濟ふ）」とある。同じ意味の「賤價」も『太平広記』では二例であるが、こちらの方が一般的。

○緡 緡銭。一千文単位で緡（銭差し用のひも）に通して括った銭。『太平広記』には頻見され、『河東記』においても他に05「韋丹」、06「呂群」、29「辛察」の三話に見える。

○郎君 年少者に対する敬称。牛志平・姚兆女『唐人称謂』を参照（七〇頁）。婦人が夫あるいは恋人を呼ぶ場合にも用いられ、『太平

広記』にも頻見される。『河東記』では他に19「成叔弁」、28「崔紹」の二話に見える。

○直七十千已上 「直」は「値」に同じ。値段。この通用は極めて一般的で、『河東記』においても05「韋丹」に「問其直幾何（其の直^{あたひ}の幾何なるかを問ふ）」、17「韋浦」に「丐茶酒直（茶酒の直を丐^こふ）」の用例が見える。「七十千」は、【注】3「七十千」に述べたように千錢（一緡）が七十で、七万錢。「已上」は「以上」に同じ。なお、『河東記』の05「韋丹」には、「幸借吾五十千文、以充韋君改一乘（幸ひに吾に五十千文を借さば、以て韋君の一乗を改むるに充てん）」の一節が見え、馬の値段が五万錢と分かる。しかもこの話では、命を助けてもらった謝礼として贈るという設定になっており、高額な駿馬の値段と考えると良いであろう。ここから推測すると、盧伝素が試しに低くつけた六万は、それでもかなりの高値ということになる。彼が告げた値段は、不意に気が変わったの思いつきではなく、馬の通児が言った十万では余りに高額すぎるので、ひとまず六万あたりで探りを入れてみようとしたのではないだろうか。前文に「微驗」とあるのは、そのことを示しているように思われる。買い手の胡軍將は、それを駿馬の一般的な価格五万に値切ろうともせず、何と七万に引き上げたのである。本話における馬の値段の設定には、当時のこうした相場が念頭に置かれていたと考えられる。なお明・李世熊『錢神志』巻五の節録は、この箇所「此軍將前生定負此馬七十千（此の軍將前生に定^{かなら}ず此の馬に七十千を負ふならん）」と注記を添えている。

○水草 水と牧草、水と秣。『史記』卷一〇九・李將軍列伝に「廣行無部伍行陣、就善水草屯舍止、人人自便、不擊刁斗以自衛（広行くに部伍行陣無く、善き水草に就きて屯舎し止まり、人人自ら便にして、刁斗を撃ちて以て自衛せず）」、同卷一一〇・匈奴列伝に「逐水草遷徙、毋城郭常處耕田之業（水草を逐ひて遷徙し、城郭の常処、耕田の業母し）」。『太平広記』にも散見され、卷二二・画二「楊子華」に「常畫馬於壁。夜聽、聞啼齧長鳴、如索水草聲（常て馬を壁に画く。夜に聴くに、啼齧長鳴して、水草を索むる声の如きを聞く）」（出典は唐・張彦遠『名画記（歴代名画記）』、卷四三六・畜獸三・驢「王甲」に「唯見驢頭面流血、如母傷狀。女抱以號泣。兄回、怪而問之、女以狀告。於是兄妹抱持慟哭。驢亦涕泣皆流、不食水草（唯だ驢の頭面流血し、母の傷の狀の如きを見る。女抱きて以て号泣す。兄回り、怪しみて之を問ふに、女狀を以て告ぐ。是に於いて兄妹抱持して慟哭す。驢も亦た涕泣皆な流れ、水草を食らはず）」（出典は唐・道世『法苑珠林』）などとある。「試水草」は、水や秣を与えて健康状態を試してみることであろうが、他に用例が見当たらない。

○載其緡歸 馬の代価の緡錢を車にのせて帰る。緡錢は多額になると重くて持ち運べないので、車などに載せて運んだ。『太平広記』にもこうした場面はしばしば登場し、卷一六・神仙一六「張老」に「韋怒曰、爲吾報之。令日内得五百緡則可。媼出、以告張老。乃曰、諾。未幾、車載納于韋氏（韋怒りて曰く、「吾が爲に之に報ぜよ。令日内に五百緡を得れば則ち可なり」と。媼出で、以ち張老に告ぐ。乃ち曰く、「諾」と。未だ幾ならずして、車載して韋氏に納む）」、「遂

得載錢而歸（遂に錢を載せて帰るを得たり）」（出典は唐・李復言『続玄怪録』、卷三七四・靈異「胡氏子」に「崩穴中得錢數百萬、乃棄麥載錢而歸（崩穴中に錢數百萬を得て、乃ち麥を棄てて錢を載せて帰る）」（出典は前蜀・杜光庭『録異記』）などである。『河東記』では他に05「韋丹」に「胡蘆先生載五十緡至逆旅中（胡蘆先生五十緡を載せて逆旅中に至り）」、29「辛察」には「載錢至延平門外（錢を載せて延平門外に至る）」とある。また11「盧佩」には、「其女僮隨後收拾紙錢、載於馬上、即變爲銅錢（其の女僮後ろに随ひて紙錢を收拾し、馬上に載せれば、即ち變じて銅錢と爲る）」と馬に銅錢を載せており、こうした描写が多いように思われる。

○夜來 昨夜。昨夜から。これも常用の語で、例えば唐・孟浩然「春曉」に「夜來風雨聲、花落知多少（夜來風雨の聲、花の落つること知る多少ぞ）」とある（『全唐詩』卷一六〇、『孟浩然集』卷四）。『河東記』では他に、29「辛察」、24「韋齊休」の二話に見える。なお、「近來」「秋來」など時間を表す言葉につく「來」は、「……このかた」の意味が薄れていることも多く、本話の場合もこれに該当しよう。

○飽發 大量に汗をかくことをいうか。明鈔本（沈本）の「暴發」であれば分かりやすい。ただ、馬がびっしょり汗をかいて死ぬということであれば、臨場感が増すのではないだろうか。論拠となる適切な用例を探し出せないが、一先ず底本に従って解釈しておく。待考。

○斃 たおれる。死ぬ。

【参考】

○通児の詩

通児の詩の平仄および押韻は、次の通りである。

既食丈人粟

●●●●●

又飽丈人芻

●●●●●◎上平声十虞

今日相償了

○○○○●

永離三惡途

●○○●◎上平声十一模（虞模同用）

起句と承句の二・四字目を共に●○として通常の平仄式から外しているが、これは盧伝素に飼養されたことを「丈人粟」「丈人芻」と重ねて詠ったための措置。承句から結句にかけては、粘・対・二四不同いずれも平仄式に従っている。馬に転生しての償債を終え、畜生道から脱する喜びを詠うものの、詩として優れているとはいえない。悪行が祟った不良少年の作ということであれば、むしろ稚拙さを感じさせる出来映えの方が相応しいであろうか。

○「畜類償債譚」について

前世で負債を残して死んだため、家畜に生まれ変わってそれを償う話は、六朝期に姿を現し、その後、陸続と生み出されてゆく。基づくところは仏教の「畜生報業」の思想で、例えば後秦・鳩摩羅什訳『成実論』巻八の「六業品」には、「業有六種。地獄報業・畜生報業・餓鬼報業・人報・天報・不定報業。……畜生報業、何者是耶。答曰、若人雑善起不善業、故墮畜生。又結使熾盛、故墮畜生。……又若人舐債不償、墮牛羊羴鹿驢馬等中、償其宿債。如是等業、墮畜生中（業

には六種有り。地獄報業・畜生報業・餓鬼報業・人報・天報・不定報業なり。……畜生報業とは、何者か是れなるか。答へて曰く、「若し人善に雑へて不善の業を起さば、故に畜生に墮つ。又た結熾盛ならしめば、故に畜生に墮つ。……又た若し人の債に舐れて償はざれば、牛・羊・羴・鹿・驢・馬等の中に墮ち、其の宿債を償ふ。是の如き等の業は、畜生中に墮つ」と説かれている（『大正新脩大蔵経』第三二卷・論集部、三〇〇頁中段～三〇一頁下段）。この思想は仏典中に譬喩譚としても語られ、漢訳では後漢・支婁迦讖訳『雜譬喩経』、後秦・竺仏念訳『出曜経』巻三、西晋・竺法護訳『生経』巻四などに、いずれも牛への転生譚として見える。

後漢期に仏教を受容して大きな影響を受けた中国では、こうした「畜生報業」の思想は深く浸透して説話を量産し、それはさらに仏典とともに日本にも伝えられていった。中国の人々にとって関心を引いたのは、なかでも借財による家畜への転生だったようで、明清に至るまで、驚くほどの数の説話や小説が残されている。澤田瑞穂氏によって「畜類償債譚」と命名されたこの話群は、唐代に至って飛躍的に数を増し、内容も六朝期の素朴な段階から発展して、伏線を張り構成にも趣向を凝らした作品が登場する。当初は仏典の影響により専ら牛であった転生の動物が、馬やロバあるいはその他の家畜へと広がってゆくのも、この唐代である。「盧従事」は、そうした新たな発展を遂げた所謂「畜類償債譚」の代表作と言える。動物が人語するというパターンは古く、「盧従事」もこれを踏襲する。しかし、それをただ一度限りの不思議として描き出す技法には、素

朴な六朝志怪小説とは格段の差がある。盧伝素と馬との情の交流を絡めたり、馬の値段を伝素にわざと安く言わせるなど、作者薛漁思の細部にわたる配慮と工夫が窺われる。その結果、本話は唐代までの畜類償債譚では最も長い、優れた作品として仕上がっている。

なお、計算してみると負債の金額とびったり符合するという結びは、特に好まれたようで、「盧從事」と同じ巻四三六・畜獸部に収められる「韋有柔」（出典は唐・戴孚『広異記』）、「吳宗嗣」（出典は南唐・徐鉉『稽神録』）の馬の話、「張高」（出典は唐・李復言『続玄怪録』）、「東市人」（出典は唐・段成式『酉陽雜俎』）の驢馬の話なども、このパターンを踏襲している。

償債のための墮畜転生の物語に関しては、澤田瑞穂『仏教と中国文学』（国書刊行会、一九七五年）に、「釈教劇叙録」「畜類償債譚」の博搜を極めた二篇の論文がある。この先駆的な二論文を継ぐかたちで、岡田充博『唐代小説「板橋三娘子」考——西と東の変驢変馬譚のなかで——』（知泉書館、二〇一二年）が、第三章第二節および第四章第二節の「1「応報譚」系」の項において、さらに福田素子『債鬼転生——討債鬼故事に見る中国の親と子——』（知泉書館、二〇一九年）が、第二部第四章「金額一致表現から見た畜類償債譚」において畜類償債譚を取り上げている。

○「盧從事」収録文献

李劍国『唐五代志怪传奇叙録（増訂本）』によれば、本話を収録する文献としては、他に左記のものがある。

明・呉大震編『広艶異編』巻一九「盧從事」
明・仁孝皇后徐妙雲『大明仁孝皇后勸善書』巻一九
明・李世熊編『錢神志』巻五・恢網第九下・淪入畜道償所宿負
また『全唐詩』巻八六七・怪には、通児の詩が「黑駒別盧傳素詩」と題して収められ、本話の節録を附す。

（岡田充博）

第三十四話 李自良（巻四百五十三・狐七）

【全文】

唐李自良少在兩河間。落拓不事生業。好鷹鳥。常竭囊貨。爲溝澮之用。馬燧之鎮太原也。募以能鷹犬從禽者。自良卽詣軍門。自上陳。自良質狀驍健。燧一見悅之。置於左右。每呼鷹逐獸。未嘗不愜心快意焉。數年之間。累職至牙門大將。因從禽。縱鷹逐一狐。狐挺入古壙中。鷹相隨之。自良卽下馬。乘勢跳入壙中。深三丈許。其間朗明如燭。見塲場上有壞棺。復有一道士長尺餘。執兩紙文書立於棺上。自良因掣得文書。不復有他物矣。遂臂鷹而出。道士隨呼曰。幸留文書。當有厚報。自良不應。乃視之。其字皆古篆。人莫之識。明旦。有一道士。儀狀風雅。詣自良。自良曰。仙師何所。道士曰。某非世人。以將軍昨日逼奪天符也。此非將軍所宜有。若見還。必有重報。自良

固不與。道士因屏左右曰。將軍裨將耳。某能三年內。致本軍政。無乃極所願乎。自良曰。誠如此願。亦未可信。如何。道士即超然奮身上騰空中。俄有仙人絳節。玉童白鶴。徘徊空際。以迎接之。須臾復下。謂自良曰。可不見乎。此豈是妄言者耶。自良遂再拜。持文書歸之。道士喜曰。將軍果有福祚。後年九月內。當如約矣。於時貞元二年也。至四年秋。馬燧入覲。太原耆舊有功大將。官秩崇高者。十餘人從焉。自良職最卑。上問。太原北門重鎮。誰可代卿者。燧昏然不省。唯記自良名氏。乃奏曰。李自良可。上曰。太原將校。當有耆舊功勳者。自良後輩。素所未聞。卿更思量。燧倉卒不知所對。又曰。以臣所見。非自良莫可。如是者再三。上亦未之許。燧出見諸將。愧汗洽背。私誓其心。後必薦其年德最高者。明日復問。竟誰可代卿。燧依前昏迷。唯記舉自良。上曰。當俟議定於宰相耳。他日宰相入對。上問馬燧之將孰賢。宰相愕然。不能知其餘。亦皆以自良對之。乃拜工部尚書。太原節度使也。 出河東記

【原文】 1

唐李自良少在兩河間、落拓不事生業。好鷹鳥、常竭囊貨^①、爲韝繼之用。馬燧之鎮太原也、募以能鷹犬從禽者。自良即詣軍門、自上陳^②。自良質狀驍健、燧一見悅之、置於左右、每呼鷹逐獸、未嘗不愜心快意焉。數年之間、累職至牙門大將。因從禽、縱鷹逐一狐。狐挺^③入古壙中、鷹相隨之。自良即下馬、乘勢跳入壙中、深三丈許、其間朗朗如燭。見塋場上有壞棺、復有一道士長尺餘、執兩紙文書立於棺上。自良因掣得文書、不復有他物矣。遂臂鷹而出。道士隨呼曰、

幸留文書^④、當有厚報。自良不應、乃視之、其字皆古篆、人莫之識。明旦、有一道士、儀狀風雅、詣自良、自良曰、仙師何所自^⑤。道士曰、某非世人、以將軍昨日逼奪吾^⑥天符也^⑦。此非將軍所宜有、若見還、必有重報。自良固不與、道士因屏左右曰、將軍裨將耳、某能三年內、致本軍政。無乃極所願乎。自良曰、誠如此願。亦未可信、如何。

【訓読】 1

唐の李自良^{わか}少きとき両河の間に在り、落拓^{らくたく}として生業を事とせず。鷹鳥を好み、常に囊貨^{なうせつ}を竭^つくし、韝^{こう}繼^{せつ}の用と爲す。馬燧^{ばすい}の太原に鎮たるや、募るに鷹犬從禽^{じゆうきん}を能くする者を以てす。自良即ち軍門に詣り^{いた}、自ら上陳す。自良の質狀驍健^{けうけん}にして、燧一たび見て之を悦^{よろこ}び、左右に置き、鷹を呼び獸を逐ふ毎に、未だ嘗て心を愜^{こころよ}くし意を快よくせずんばあらず。数年の間、職を累ね牙門大將に至る。因りて禽を從へ、鷹を縱^{ほし}にし一狐を逐はしむ。狐挺^{すす}みて古壙中に入れば、鷹は相ひ之に隨ふ。自良即ち馬を下り、勢いに乗り壙中に跳入すれば、深さ三丈許^{ばかり}にして、其の間朗朗なること燭の如し。塋場^{せんたふ}上を見れば壞棺有り、復た一道士の長尺余なる有り、両紙の文書を執り棺上に立つ。自良因りて文書を掣し得て、復た他物有らざるなり。遂に鷹を臂にして出づ。道士呼ぶに隨ひて曰く、「幸はくは文書を留めよ、当に厚報有るべし」と。自良応ぜず、乃ち之を視るに、其の字は皆古篆にして、人之を識^しる莫し。明旦、一道士有り、儀狀風雅にして、自良に詣れば、自良曰く、「仙師何の自りする所ぞ」と。道士曰く、「某^{われ}は世人に非ず、將軍昨日吾が天符を逼奪するを以てすればなり。此れ將軍の宜しく有つべき所に非ず、若

し還さるれば、必ず重報有らん」と。自良固く与へず、道士因りて左右を屏^{しりぞ}けて曰く、「將軍は裨將^{ひしやう}なるのみ、某^{われ}は能く三年の内に、本軍政に致すべし。乃ち極めて願ふ所無からんや」と。自良曰く、「誠に此の願ひの如きも、亦た未だ信ずべからず、如何せん」と。

【訳】 1

李自良は少年時代に両河の間で生活していたが、気ままに生きて生業に就かなかった。鷹を飼うのが趣味で持ち金はその飼育の用に当てた。馬燧が太原府の長官の折に、鷹匠や狩人を募集した。自良はすぐに軍門に出向き、自ら名乗り出た。自良は偉丈夫であり、馬燧はそれを見ては喜び、身近におき、狩りに出かけるたびに、馬燧の意に適わなかったことはなかった。数年間、いくつかの役目を勤め牙門大将にまでになった。ある時、鳥を従え鷹を操り、一匹の狐を追った。すると狐は古い塚に逃げ込み、鷹はそれを追った。自良は馬を下り、勢いに任せて塚の中に飛び込むと、そこは三丈ばかりの深さで、灯火を点したのような明るさであった。煉瓦製の長椅子の上には壊れた棺が置いてあり、一尺余りの一人の道士が手に二枚の文書を持ち棺の上に立っている、李自良はそれを引っ張って手に入れると、他には何もなかった。やがて鷹を腕にとまらせて塚から出て来た。こちらの呼びかけに道士は「文書を返してくれ給え、きつと褒美があるう」と言った。自良はそれには応えず、じつと文書を見ると、文字はいずれも古篆により書かれており、判読できる者はいない。明朝、容貌に気品のある道士が自良のもとを訪れたので、自良は「仙人様はどこより来られたのですか」と聞いた。仙人は「私

は人間世界のものではない。將軍が昨日、私の天符を無理矢理奪い取ったのでやって来ました。これは將軍の持つていてはならないものです。もし返してくれるのならば、きつと沢山の褒美が下されましよう」と答えた。自良はなんとしても返さなかったので、道士は周囲の者を下がらせ言った「將軍は、まだ副將でいらっしゃる。私ならば三年間の内にあなたをこの土地の長官にして差し上げることができる。あなたの念願だったのではありませんか」と。自良は答えて言った。「わが念願であることに相違はないが、まだ信じることは出来ないし、どうしたら良いか分からない」と。

【校記】 1

- ① 「貨」、会校本校記に「孫本作「質」。沈本作「資」とある。
- ② 「上陳」、会校本校記に「沈本作「獻其藝」とある。
- ③ 「挺」、会校本は「突」に作り、校記に「現據沈本改」という。伝奇輯校本は「挺」に作り、校記に「明鈔本作「突」、『會校』據改」という。
- ④ 「文書」、伝奇輯校本校記に「孫校本下有「得未」二字」とある。会校本校記には言及なし。
- ⑤ 「自」、会校本校記に「原無此字。現據孫本・沈本補」とある。伝奇輯校本も同じ。これに従う。
- ⑥ 「吾」、会校本校記に「原無此字。現據沈本補」とある。伝奇輯校本も同じ。これに従う。
- ⑦ 「也」、会校本校記に「沈本無此字」とある。

【注】 1

○李自良 人名。方積六・吳冬秀編撰『唐五代五十二種筆記小説人名索引』（中華書局、一九九二年）によれば本話のみに見える。『唐五代人物伝記資料綜合索引』（東方書店、一九八七年）に指摘するように『旧唐書』卷一四六、『新唐書』卷一五九に伝が立てられ、また両唐書の処々に名が見える。【参考】を参照されたい。なお、崔元略「興元元從正議大夫行内侍省内侍知省事上柱國賜紫金魚袋贈特進左武衛大將軍李公墓誌銘并序」（『全唐文』卷七一七）に「獻功未幾、又屬太原軍帥李自良薨於鎮、監軍使王定遠爲亂兵所害。甲士十萬、露刃相守、公馳命安撫、下車乃定。便充監軍使（獻功未だ幾ならず、又た^{たまたま}属太原の軍帥李自良鎮に薨じ、監軍使王定遠乱兵の害する所と爲る。甲士十萬、刃を露はして相守り、公馳命して安撫し、車を下りて乃ち定まる。便ち監軍使に充てらる）」とあり、李自良の名が見える。

○兩河 河北と河南。その間の地域で。『太平広記』には他に二例、うち卷一九五・豪俠三「紅線」には、「是時至徳之後、兩河未寧、以滏陽爲鎮。命嵩固守、控壓山東（是の時至徳の後、兩河未だ寧ならず、滏陽を以て鎮と爲す。嵩に命じて固く守らしめ、山東を控圧す）」（出典は唐・袁郊『甘沢謠』）。

○落拓 奔放不羈。杜牧「遣懷」に「落魄（一作托）江湖載酒行、楚腰腸斷掌中輕（江湖に落魄して酒を載せて行く、楚腰纖細掌中の情）。荒井健氏は「規範に外れた人物の性行を形容する擬態語で、外見内実ともに醜惡な社会的脱落者に対して用いられるマイナスのばあい、気宇広大もしくは濃厚多量の感情の所有者たる大型人間に

用いられるプラスのばあいがある。」（中国詩文選一八『杜牧』八頁、筑摩書房、一九七四年）と指摘している。本話の場合には後者がふさわしい。ほかに『太平広記』卷一六・神仙一六「杜子春」に「杜子春者、蓋周隋間人。少落拓、不事家産（杜子春なる者、蓋し周隋の間の人なり。少くして落拓、家産を事とせず）」（出典は唐・李復言『続玄怪録』）。

○不事生業 決まった職業を持たない。「生業」は生活を維持するための仕事。『太平広記』卷九二・異僧六「惠照」に「聞其遷于瓜州、則又徑往就謁。長沙少長綺紈、而又早貴、雖流放之際、尚不事生業。時方與沈妃酣飲、吾與彦文再拜于前（其の瓜州に遷るを聞き、則ち又た徑ちに往きて就きて謁す。長沙の少きときより長じて綺紈、而して又た早に貴ければ、流放の際と雖も、尚ほ生業を事とせず。時に方に沈妃と酣飲す、吾彦文と前に再拜す）」（出典は唐・張誥『宣室志』）。

○好鷹鳥 鷹を使った狩猟を好む。いわゆる鷹匠を指す。『太平広記』には、卷一〇三・報応二・金剛經「李丘一」に「唐李丘一好鷹狗畋獵（唐の李丘一は鷹狗の畋獵を好む）」（出典は唐・盧求『報応記（金剛經報応記）』、卷四六〇・禽鳥一・鷹「劉聿」に「唐永徽中、萊州人劉聿性好鷹（唐の永徽中、萊州の人劉聿性鷹を好む）」（出典の記載なし）などがある。

○囊貨 袋に入れた品。ここでは、手持ちの金目の品と解した。校記にあるように「囊資」「囊質」であっても、『太平広記』にその用例はない。唐・賈島「送去華法師」に「囊中無寶貨、船戸夜局稀（囊

中宝貨無く、船戸夜に扇すること稀なり」(『全唐詩』卷五七三)とある。

○爲韝紐之用 鷹や犬を飼育する為の費用にする。「韝」は、たかたぬき。鷹狩りをするとき鷹を止まらせる、腕を蔽う革製の具。「紐」は、獣を繋いでおくかけ縄。ほだし。隋・盧思道「北齊興亡論」に「韓長鸞以韝紐之能、悅其趨走(韓長鸞韝紐の能を以て、其の趨走を悦ぶ)」(『文苑英華』卷七五一、『全隋文』卷一六)。

○馬燧 人名。七二六～七九五。唐代汝州(現在の河南省郟県)の人。字は洵美。博学にして兵法に通じた。安祿山の反乱時には范陽にあつて死に瀕したが免れた。大暦年間、鄭州・懷州・隴州・商州の刺史を歴任した。徳宗の時、朝命を奉じて魏博節度使田悦を成敗して勝利した。勇猛さと知略に長けた將軍として知られ、李晟・渾瑊と共に「三大將」と呼ばれた。伝記は、『旧唐書』卷一三四、『新唐書』卷一五五に立項されている。『太平広記』には、卷一九〇・將帥二「馬燧」(出典は唐・胡璩『譚賓録』、卷三五六・夜叉一「馬燧」(出典に「傳異記」とあるが、会校本校記に「陳本・沈本作「博異記」」とあり、さらに『類説』等に「博異志」所引として出ること指摘する。『博異志』は唐・鄭還古撰)がある。

○鎮太原 太原府(現在の山西省の中部、太原盆地北端に位置する省都)の長官になる。『旧唐書』本伝によると大暦十四年六月、徳宗本紀によると同年五月としている。

○能鷹犬 狩猟に使用する鷹や犬の飼育と使役をよくする者。「鷹犬」の用例は『太平広記』卷一〇四・報応三・金剛經「田氏」に「易

州參軍田氏、性好畋獵、恆養鷹犬爲事(易州參軍田氏、性好畋獵を好み、恒に鷹犬を養ひて事と爲す)」(出典は唐・戴孚『広異記』、卷一三二・報応三一・殺生「姜略」に「隋鷹揚郎將天水姜略、少好畋獵。善放鷹犬(隋の鷹揚郎將天水の姜略、少くして畋獵を好み、善く鷹犬を放つ)」(出典は唐・唐臨『冥報記』)。

○從禽者 狩人。「從禽」は、鳥獸を追逐する。「禽」は獲物、「從」は執着して追いかける。田獵を言う。『易』屯(六三象)に「即鹿無虞、以從禽也。君子舍之、往吝窮也(鹿に即くに虞無し、禽に従ふを以てなり。君子之を舍つ、往けば吝、窮するなり)」。晋・左思「蜀都賦」(『文選』卷四)に「若夫王孫之屬、郤公之倫、從禽于外、巷無居人(夫の王孫の属、郤公の倫の若き、禽を外に従ひ、巷に居人無し)。「從禽」の例は、『太平広記』卷三六二・妖怪四「李虞」に「全節李虞、好大馬、少而不逞。……又歲暮、野外從禽。禽入墓林。訪之林中、有死人面仰(全節の李虞、大馬を好み、少くして不逞なり。……又た歲暮に、野外に禽に従ふ。禽墓林に入る。之を林中に訪ぬれば、死人の面の仰ぐ有り)」(出典は唐・牛肅『紀聞』)。

○軍門 軍營の門。

○上陳 目上の者に陳述する。唐・柳宗元「爲戸部王叔文陳情表」(『柳宗元集』卷三八)に「進退窮蹙、昧死上陳(進退窮蹙し、昧死上陳す)」。

○質狀 体つき。姿態。五代・王定保『唐摭言』節操に「裴晉公質狀眇小相不入貴(裴晉公の質狀眇小にして相は貴に入らず)」。『太平広記』卷七三・道術三「駱玄素」に「忽遇老翁、衣褐衣、質狀凡

陋、策杖立于長松之下（忽ち老翁の、褐衣を衣、質狀凡陋にして、杖を策きて長松の下に立てるに遇ふ）（出典は唐・張讀『宣室志』）、卷一九五・豪俠三「胡證」に「唐尚書胡證質狀魁偉、膂力絶人（唐尚書胡證は質狀魁偉にして、膂力人に絶す）」（出典は五代・王定保『唐摭言』）などがある。

○**驍健** 勇猛で身体強健である。『太平広記』は他に二例、うち卷三〇四・神一四「淮南軍卒」に「將行、誠之曰、吾有急事、候汝還報。以汝驍健、故使西去、不可少留。計日不至、當死（將に行かんとし、之に誠めて曰く、「吾に急事有り、汝の還りて報ずるを候つ。汝の驍健なるを以て、故に西去せしむ、少くも留まるべからず。日を計りて至らずんば、死に当たる」と）」（出典は唐・張讀『宣室志』）。

○**置於左右** 身近に置く。側近として重用した。

○**愜心** 快く思う。満足する。『後漢書』卷八四・楊彪伝に「司隸校尉陽球因此奏誅甫、天下莫不愜心（司隸校尉陽球此に因りて甫を誅せんことを奏すれば、天下心に愜はざるは莫し）」。『太平広記』は他に二例、うち卷二五二・諛諧七「楊虞卿」に「張深信之。既婚、殊不愜心（張深く之を信ず。既に婚し、殊に心に愜はず）」（出典は唐・孟棻『本事詩』）。

○**快意** 意のままになる。直前の「愜心」と連用して強調している。『漢書』卷七二・鮑宣伝に「治天下者當用天下之心爲心、不得自專快意而已也（天下を治むる者は、當に天下の心を用て心と爲すべく、自ら快意を専らにするを得ざるのみ）」。

○**累職** さまざまな役職に就く。『太平広記』ではもう一例、卷

八四・異人四「李業」に「明年、楊鎮爲仇士良開府擢用、累職至軍使、除涇州節度使（明年、楊鎮仇士良の府を開くに擢用せられ、累職して軍使に至り、涇州節度使に除せらる）」（出典は五代・杜光庭『錄異記』）。

○**牙門大將** 軍營の主力となる軍の將軍。唐・劉禹錫「平齊行」に「牙門大將有劉生、夜半射落欃槍星（牙門大將に劉生有り、夜半射落とす欃槍星）」（『全唐詩』卷三五六、『劉禹錫集箋註』卷二五）とある。「牙旗」（象牙の飾りのある旗）を軍門に立てたことによる。漢・張衡「東京賦」（『文選』卷三）に「戈矛若林、牙旗繽紛（戈矛林の若く、牙旗繽紛たり）」とあり、三国呉・薛綜の注に「兵書曰、牙旗者、將軍之旌。謂古者天子出、建大牙旗、竿上以象牙飾之、故云牙旗（兵書に曰く、「牙旗とは、將軍の旌なり」と。謂へらく古は天子の出づるや、大牙旗の竿上象牙を以て之に飾るを建つ、故に牙旗と云ふ）」とある。『新唐書』卷一五九・李自良伝には「兼訓徙太原、又爲牙將（兼訓太原に徙り、又た牙將と爲る）」。

○**挺入** 勢いよく入る。李德裕「請准兵部依開元二年軍功格置跳盪及第一第二功狀」に「臨陣對寇、矢石未交、先鋒挺入、陷堅突集（陣に臨みて寇に對し、矢石未だ交へざるに、先鋒挺み入り、堅を陥れ集を突く）」（『全唐文』卷七〇二）。

○**古壙中** 古い塚の中。「壙」は、塚穴。あな。狐は塚に棲んでいると考えられていた。「古壙」は『太平広記』に他に二例を見ると考えられていた。卷三七二・精怪五「桓彦範」に「範逐之愈急、因入古壙中。泊明就視、乃是一敗方相焉（範之を逐ふこと愈いよ急にして、因りて古

壙中に入る。明に泊びて就きて視れば、乃ち是れ一の敗れし方相なり」(出典は唐・戴孚『広異記』)。

○乗勢 その機に乗じて。勢いに乗って。『孟子』公孫丑上に「齊人有言曰、雖有智慧、不如乘勢(齊人言有りて曰く、「智慧有りと雖も、勢ひに乗るに如かず」と)」、『北史』卷二三・于仲文伝に「乗勢撃之、所以制勝(勢ひに乗じて之を撃つ、勝ちを制する所以なり)」。

○三丈 唐代の度量衡では約十メートル弱。

○朗明如燭 蠟燭のように明るい。

○塼場 煉瓦製の寝台。「塼」は、かわら、れんが。「甄」に通じ、また「磚」とも。「塼」は、落ち込む、落下する、あるいは垂れ下がったさまをいうが、ここでは寝台、長椅子をあらわす「榻」の意味で用いられている。煉瓦製ということで土偏が用いられているであろう。「塼場」の用例は他に見当たらないが、「磚場」は『宋史』卷四六二・方技下・甄棲真伝に「乾興元年秋、謂其徒曰、此歳之暮、吾當逝矣。即宮西北隅自整殯室。室成、不食一月、與平居所知絳別、以十二月二日衣紙衣臥磚場卒(乾興元年の秋、其の徒に謂ひて曰く、「此の歳の暮に、吾当に逝かん」と。即ち宮の西北隅に自ら殯室を整く。室成りて、食らはざること一月、平居の知る所と別れを叙べ、十二月二日を以て紙衣を衣、磚場に臥して卒す)」。時代を降る資料となるが、死体あるいは棺を載せるために用いられた寝台で、この場面の「塼場」に符合する。

○壞棺 壊れた棺。『太平広記』には他に二例を見る。卷三二一・鬼七「桓恭」に「牀前有一陷穴、詳見古冢、視之果有壞棺、恭每食、

常先以飯投穴中(牀前に一陷穴有り、詳らかに見るに古冢にして、之を視るに果して壞棺有り、恭食する毎に、常に先づ飯を以て穴中に投ず)」(出典は南朝宋・劉義慶『幽明録』)。

○臂鷹而出 鷹を腕に止まらせて出てくる。

○厚報 手厚い報酬。『漢書』卷三七・爰布伝に「於是嘗有德、厚報之、有怨必以法滅之(是に於いて嘗て徳有れば、厚く之に報じ、怨み有れば必ず法を以て之を滅ぼす)」。『太平広記』にも十余例。

○其字皆古篆 文書の書かれている文字が大篆であった。周の文王の時に史籀が作ったと伝わる。始皇帝が定めた文字は、大篆を簡略にして実用化したものの、小篆と言う。「古篆」は『太平広記』には他に六例を見る。卷一四〇・徵応六・邦国咎徵「汪鳳」に「而印文不類前體、而全如古篆、人無解者(而して印文は前体に類せず、全く古篆の如くして、人の解する者無し)」(出典は唐・薛用弱『集異記』)。

○儀狀風雅 容貌に気品がある。『太平広記』卷一六・神仙一六「張老」に「一青衣引韋前拜。儀狀偉然、容色芳嫩(一青衣韋を引きて前み拝す。儀狀偉然として、容色芳嫩たり)」(出典は唐・李復言『続玄怪録』)。

○仙師 仙人の尊称。ここでは、道士に対する尊称。『太平広記』卷三六・神仙三六「魏方進弟」に「一旦於門外曝日搔痒、其鄰里見朱衣使者領數十騎至、問曰、仙師何在。遂走到見搔痒者、鞠躬趨前、俯伏稱謝(一旦門外に於いて日に曝され痒を搔く、其の隣里は朱衣の使者の数十騎を領して至るを見、問ひて曰く、「仙師は何くに

在りや」と。遂に走り到れば痒を搔く者を見、鞠躬して前に趨り、俯伏して称謝す」(出典は唐・盧肇『逸史』)。

○何所自 どこから来たのか。『河東記』には、14「王錡」に「乃曰、某潦倒一任二十年、足下要相呼、亦可謂爲王耳。錡曰、未諭大王何所自(乃ち曰く、「某は潦倒たりて一たび任ぜらるること二十年、足下相呼ぶを要むれば、亦た謂ひて王と爲すべきのみ」と。錡曰く、「未だ大王は何の自りする所なるかを論らず」と)。」

○某非世人 わたしはこの世界の人間ではない。「世人」の用例は、『楚辭』漁父に「世人皆濁、何不泥其泥、而揚其波(世人皆濁らば、何ぞ其の泥を泥して、其の波を揚げざる)」とある。『太平広記』には、卷一三・神仙一三「孔安國」に「孔安國者、魯人也。常行氣服鉛丹、年三百歳、色如童子。隱潛山、弟子隨之數百人。每斷穀入室、一年半復出、益少。其不入室、則飲食如常、與世人無異(孔安國なる者、魯の人なり。常に氣を行行鉛丹を服し、年三百歳にして、色は童子の如し。山に隱潛し、弟子之に隨ふもの數百人。毎に穀を断ち室に入り、一年半にして復た出づ、益ます少し。其の室に入らざれば、則ち飲食常の如く、世人と異なる無し)」(出典は晋・葛洪『神仙伝』)などのほか多数を見ることができる。

○逼奪 無理に奪い取る。『晋書』卷八九・忠義伝「吉挹」に「挹不從、友人逼奪其刀(挹從はず、友人其の刀を逼奪す)」。『太平広記』卷二六七・酷暴一「來俊臣」には「逼奪同列參軍妻、仍辱其母。莫敢言者(同列の參軍の妻を逼奪し、仍りて其の母を辱む。敢へて言ふ者莫し)」(出典は唐・韓琬『御史台記』)の一例のみ。

○天符 天から下される瑞祥、あるいは天子の功德を記した文章。『漢書』卷九九・王莽伝に「天符仍臻、元氣大同(天符仍りて臻り、元氣大同す)」。『太平広記』卷一三七・徵応「應樞」に「後漢汝南應樞生四子、見神光照社。樞見光、以問卜人。卜人曰、此天符也。子孫其興乎。乃探得黃金。自是諸子官學、并有才名。至瑒、七世通顯(後漢汝南の応樞四子を生み、神光の社を照らすを見る。樞光を見、以て卜人に問ふ。卜人曰く、「此れ天符なり。子孫其れ興れるかな」と。乃ち黄金を探し得たり。是れ自り諸子官学にありて、並びに才名有り。瑒に至るまで、七世通じて顯なり)」(出典は『孝子伝』)とあるほか散見する。

○重報 多大な褒美。前出の「厚報」と同じ意。『太平広記』卷四二一・龍四「任頊」に「如是者三、我得完其生矣。必重報。幸無他爲慮(是くの如きこと三たび、我其の生を完くするを得れば、必ずや重く報ひん。幸はくは他の慮を爲す無かれ)」(出典は唐・張讀『宣室志』)。

○屏左右 人払いをして。「屏」は、しりぞける。

○裨將 副將。

○致本軍政 (貴公を) 本郡の長官にする。「軍政」は、軍中に於ける政事。それを執り行う長官。『左伝』襄公二四年に「夏、楚子爲舟師以伐吳。不爲軍政、無功而還(夏、楚子舟師を爲し以て吳を伐つ。軍政を爲さず、功無くして還る)」。

○無乃極所願乎 お前の宿願ではないのか。「無乃く乎」は、何樂士等編『古代漢語虚詞通釈』(北京出版社、一九八九年)によれば、

常に反語として使われ「豈不」に意味が近く、「不是」と訳することができる（五九八頁）と指摘する。

○如何 どうしたらよいのか。状態や手段・処置を尋ねる疑問詞。ここでは「いけません」と訓じた。

【原文】 2

道士即超然奮身、上騰空中、俄有仙人降^①節、玉童白鶴、徘徊空際、以迎接之。須臾復下、謂自良曰、可不見乎。此豈是妄言者耶。自良遂再拜、持文書歸之。道士喜曰、將軍果有福祚。後年九月内、當如約矣。於時貞元二年也。至四年秋、馬燧入覲、太原耆舊有功大將、官秩崇高者十餘人從焉、自良職最卑。上問、太原北門重鎮、誰可代卿者。燧昏然不省、唯記自良名氏、乃奏曰、李自良可。上曰、太原將校、當有耆舊功勳者。自良後輩、素所未聞、卿更思量。燧倉卒^②不知所對、又曰、以臣所^③見、非自良莫可。如是者再三、上亦未之許。燧出見諸將、愧汗洽背、私誓其心。後必薦其年德最高者。明日復問、竟誰可代卿。燧依前昏迷、唯記舉自良。上曰、當俟議定於宰相耳。他日宰相入對、上問、馬燧之將孰賢。宰相愕然、不能知其餘、亦皆以自良對之。乃拜工部尚書、太原節度使也^④。出河東記

【訓読】 2

道士即ち超然として身を奮ひ、空中に上騰すれば、俄かに仙人の絳節と、玉童・白鶴と、空際に徘徊して、以て之を迎接する有り。須臾にして復た下り、自良に謂ひて曰く、「見ざるべけんや。此れ豈に是れ妄言なる者ならんや」と。自良遂に再拝し、文書を持し

て之に歸す。道士喜びて曰く、「將軍果して福祚有り。後年九月の内、當に約の如くなるべし」と。時に貞元二年なり。四年の秋に至り、馬燧入覲するに、太原の耆旧功有る大將、官秩崇高なる者十余人焉に従ふ、自良の職最も卑し。上問ふ、「太原は北門の重鎮、誰か卿に代はるべき」と。燧昏然不省となりて、唯だ自良の名氏を記するのみ、乃ち奏して曰く、「李自良可なり」と。上曰く、「太原の將校、當に耆旧功勳なる者有るべし。自良は後輩にして、素より未だ聞かざる所なれば、卿更に思量せよ」と。燧倉卒にして對ふる所を知らず、又た曰く、「臣の見る所を以てすれば、自良に非ざれば可なる莫し」と。是くの如きこと再三なれども、上も亦た未だ之を許さず。燧出でて諸將を見るに、愧汗背を洽らし、私かに其の心に誓へり。後必ず其の年徳の最高なる者を薦めん、と。明日復た問ふ、「竟に誰をか卿に代ふべき」と。燧依前として昏迷し、唯だ記するは自良を挙ぐるのみ。上曰く、「當に議定を宰相に俟つべきのみ」と。他日宰相入りて對ふるに、上問ふ、「馬燧の將孰か賢たる」と。宰相愕然として、其の余を知る能はず、亦た皆自良を以て之に對ふ。乃ち工部尚書、太原節度使を拜するなり。河東記に出づ。

【訳】 2

道士はすぐに軽々と身を翻したかと思えば、空中に飛翔した、すると天空には仙人が手にする赤い旗印、随従の童子や白い鶴が出迎えた。再び地上に降り立ち、自良に向かって言った、「貴公も見たらう、私が嘘つきであればこんなことは出来るはずがない」。自良は道士を拝し、文書を取り出し返した。道士は喜んで言った、「將

軍、あなたは運のいい人だ、再来年の九月中に、約束通りになるだろう」その事があったのは貞元二年であった。四年の秋、馬燧は天子に謁見するために参内し、太原府の功績ある長老や位の高い部下十数人がこれに従ったが、自良の位階は一番低かった。天子は馬燧に「太原府は北方の要衝、貴公に代わるべき者と言えど誰か」と下問した。馬燧は、この時人事不省に陥り、ただ自良の名前を記憶しているだけだった。そこで、「李自良が宜しいかと存じます」と上奏した。天子はそれを聞き「太原府の将校の中には、きっと功績ある長老がいるであろう。自良は若輩でその評判を聞いては居らぬ、再考せよ」と仰せであった。馬燧はどう答えて良いかも分からず、再び「私めが考えますに、李自良のほかにはふさわしい者がおりません」と申し上げた。このようなやりとりが再三あったが、天子は許すことはなかった。馬燧は退出して配下の諸将を見渡すと、慚愧の冷や汗が背中を流れ、心中密かに次には最高の人間を推薦しようと誓った。翌日も天子は同じ下問を繰り返した。馬燧は以前と同様に脳裏が呆然とし、覚えていた李自良の名前を挙げただけであった。天子は、この件は宰相に委ねることにすると決めた。後日、宰相が天子の相談に与るべく入朝すると、天子は「馬燧の配下で最も優れているのは誰か」と下問された。この時宰相も呆氣にとられ、他の者の名前も分からず、李自良の名前を答えた。けっきょく、李自良は、工部尚書と太原節度使を拝命した。『河東記』に出る。

【校記】 2

①「絳」、会校本は「降」に作り、校記に「原作「絳」。現據沈本改」

という。談愷本は「絳」に作る。伝奇輯校本は「絳」に作り、按語に「絳節、紅色符節、仙人常用爲儀仗」として『纂異記』の「嵩岳嫁女」（『太平広記』巻五〇）を例に引く。

②「卒」、会校本校記に「沈本作「猝」字」とある。

③「所」、会校本は「愚」に作り、「現據沈本改」という。伝奇輯校本は「所」に作る。

④「也」、会校本校記に「沈本無此字」とある。

【注】 2

○超然 高く超えるさま。

○奮身 ある事柄に専念する。力を傾注する。『後漢書』卷七七・班超伝に「平陵人徐幹素與超同志、上疏願奪身佐超（平陵の人徐幹素と超と志を同じくし、上疏して身を奮ひ超を佐けんことを願ふ）」。

○上騰 上昇する。

○絳節 赤い飾りを付けた旗印。「絳」は、深紅色。「節」は、旄の尾で飾った天子の使いの持つ「使節」を指す。ここでは天界の仙人の目印。『太平広記』巻五〇・神仙五〇「嵩岳嫁女」に「未頃、聞簫韶自空而來、執絳節者前唱言、穆天子來（未だ頃ならず、簫韶の空自り來たるを聞く、絳節を執る者前^{すす}み唱^{うた}ひて言ふ、「穆天子來たれり」と）」（出典は唐・李玫『纂異記』）。

○玉童 仙童。仙人の世話をする童。

○白鶴 白い鶴。仙界の生き物。仙人が乗る乗り物。漢・劉向『列仙伝』卷上「王子喬」に「果乗白鶴、駐山頭、望之不得到、舉手謝時人。數日而去。亦立祠於緱氏山下及嵩高首焉（果して白鶴に乗り、山頭

に駐まり、之を望むも到るを得ず、手を挙げ時人に謝す。数日にして去る。亦た祠を緱氏山下及び嵩高の首に立つ」。『河東記』では

01「黒叟」、03「慈恩塔院女仙」に見える。

○徘徊 あてもなくさまよう。ぶらぶらする。『漢書』卷三・高后紀に「産不知祿已去北軍、入未央宮欲爲亂。殿門弗内、徘徊往來（産祿已に北軍に去るを知らず、未央宮に入りて乱を為さんと欲す。殿門内れず、徘徊往來す）」とあり、顔師古の注に「徘徊猶傍徨不進之意也（徘徊とは猶ほ傍徨して進まざるの意なり）」とある。『太平広記』には頻見され、卷一一・報応一一・崇経像「史世光」には「世光後復與天人十餘、俱還其家、徘徊而去（世光後に復た天人十余と、俱に其の家に還り、徘徊して去る）」（出典は南朝齊・王琰『冥祥記』）。

○空際 天辺。空中。『太平広記』卷一五・神仙一五「道士王纂」に「至第三夜、有光如晝、照其家庭、即有瑞風景雲、紛郁空際。俄而異香天樂、下集庭中（第三夜に至り、光の昼の如き有り、其の家の庭を照らせば、即ち瑞風景雲有り、空際に紛郁たり。俄にして異香天樂、庭中に下り集まれり）」（出典は前蜀・杜光庭『神仙感遇伝』）とある。

○迎接 迎える。

○此豈是妄言者耶 嘘つきであるはずがない。

○果有福祉（貴公には）天から授けられた幸福がある。『太平広記』には本話の他に三例ある。一例を引く。卷九三・異僧七「宣律師」に「人以蔬食祭之、求其福祉也（人蔬食を以て之を祭り、其の福祉を求む）」（出典は唐・釈道世『法苑珠林』）。

○後年九月内 再来年の九月中に。

○貞元二年 徳宗治世、西暦七八六年。

○四年秋 貞元四年、西暦七八八年。

○入覲 本来は諸侯が秋に天子に謁見することを指したが、ここでは地方官が天子に拝謁することを言う。『詩経』大雅「韓奕」に「韓侯入覲、以其介圭、入覲於王（韓侯入覲す、其の介圭を以て、入りて王に覲ゆ）」、後漢・鄭玄の箋に「諸侯秋見天子曰覲（諸侯秋に天子に見ゆるを覲と曰ふ）」と、唐・孔穎達「正義」に「朝者四時通名、覲則唯是秋礼也（朝とは四時の通名なり、覲とは則ち唯だ是れ秋礼なり）」とある。前文にある「九月内」「四年秋」は、いずれも秋季の参内を指している。『太平広記』には二十例ほどあり、本話に共通する用例も認められる。

○耆舊 本来は年寄りと古なじみを指すが、ここでは軍中の長老を言う。『太平広記』卷四七二・水族九「高崇文」に「予未至郡日、嘗聞龜殼猶在城内。昨詢訪耆舊、有軍資庫官宇文遇者、言、此常在庫中。元和初、節度使高崇文知之、命工人截爲腰帶胯具（予未だ郡に至らざる日、嘗て聞く龜殼猶ほ城内に在りと。昨に耆旧に詢訪すれば、軍資庫官の宇文遇なる者有り、言ふ、「此れ常に庫中に在り」と。元和の初、節度使高崇文之を知り、工人に命じて截ちて腰帶胯具と爲す）」（出典は唐・韋絢『戎幕閑談』）。

○官秩 官位によって決められる俸禄。『荀子』王霸に「百官則將齊其制度、重其官秩、若是則百吏莫不畏法而遵繩矣（百官は則ち將て其の制度を齊しくし、其の官秩を重んず、是くの若くんば、則ち百吏は法を畏れて繩に遵はざるは莫し）」。『太平広記』には、卷

二四九・詠諧五「沈佺期」に「唐沈佺期以罪謫、遇恩復官秩（唐の沈佺期罪を以て謫せらるも、恩に遇ひて官秩を復す）」（出典は唐・孟榮『本事詩』）。また、卷四五一・狐五「袁嘉祚」に「狐乃言曰、吾神能通天、預知休咎。願置我。我能益於人。今此宅已安。捨我何害。嘉祚前與之言。備告其官秩。又云、願爲耳目、長在左右。乃免狐、後祚如狐言。秩滿果遷。數年至御史、狐乃去（狐乃ち言ひて曰く、「吾が神能く天に通じ、預め休咎を知る。願はくは我を置け。我能く人を益せん。今此の宅已に安らかなり。我を捨つるも何の害かあらん」と。嘉祚前みて之と言ふ。備さに其の官秩を告ぐ。又た云ふ、「願はくは耳目と爲り、長に左右に在らん」と。乃ち狐を免ず。後に祚狐の言の如く、秩満ちて果して遷り、數年にして御史に至る。狐は乃ち去れり）」（出典は唐・牛肅『紀聞』）。

○崇高 地位が高い。『文選』卷二二、謝靈運「從游京口北固應詔」に「玉璽戒誠信、黃屋示崇高（玉璽もて誠信を戒め、黃屋もて崇高を示す）」とあり、唐・李善注には「居黃屋、所以示崇高（黃屋に居すとは、崇高なるを示す所以なり）」とある。『太平広記』にはもう一例、卷一三八・徵応四・人臣休徵「侯弘實」に「及延孝誅滅、弘實得赦。尋爲眉州刺史。節度夔州。復自寧江、遷於黔府。一州二鎮。皆近大江。官業崇高。敬奉三寶。信心無怠（延孝誅滅するに及び、弘實赦しを得たり。尋いで眉州刺史と爲り、夔州に節度たり。復た寧江自り、黔府に遷る。一州二鎮。皆大江に近し。官業崇高にして、三宝を敬奉し、信心怠ること無し）」（出典は五代・何光遠『鑑戒録』）。

○太原北門重鎮 太原は現在の山西省太原市。太原府は、唐代に於

ける北方の守りの拠点であった。太原の歴史は古く、西周初期に始まり、春秋の末に三晋の趙が晋陽城を開いた。秦漢時代は太原郡、後漢時代には并州の治所が置かれた。隋末、太原の留守であった李淵が隋討伐の兵を挙げた場所であり、唐創業の由緒ある土地であった。唐時代には「北都」（北京）として首都長安、副都洛陽に準じる地位を与えられた。唐中期以降は河東節度使の治める場所として、塞北の対異民族政策の最前線となり、軍事上の要衝となった。

○誰可代卿者 貴公と交替できる者は誰か。いわゆる「使職」の交替についての事情を伺わせる。ここでは現職が天子の下問を受けてその配下を推薦する事になっている。こうしたことが当時の一般的な交替の実態であったと思われる。安祿山の乱後、朝廷は使職の牽制に腐心したが、一方ではその土地に長く勤務し実情を知悉する人間を軽視するわけにはいかなかった。多くの反乱を引き起こしたのも、朝廷側と使職側との利害の対立があったからであろう。『後漢書』卷六二・鍾皓伝に「皓爲郡功曹、會辟司徒府、臨辭、太守問、誰可代卿者。皓曰、明府欲必得其人、西門亭長陳寔可（皓郡功曹と爲る、会たま司徒府に辟せられ、辞するに臨みて、太守問ふ、「誰か卿に代はるべき者ぞ」と。皓曰く、「明府必ずや其の人を得んと欲す、西門亭長陳寔は可なり」と）。

○昏然 頭がぼうつとして前後不覚なこと。人事不省に陥る。

○不省 分らない。はっきりしない。

○後輩 若輩。唐・韓愈の「答劉正夫書」に「凡舉進士者、於先進門、何所不往。先進之於後輩、苟見其至、寧可以不答其意邪（凡そ進士

に挙げらるる者、先進の門に於いて、何の往かざる所あらん。先進の後輩に於ける、苟くも其の至るを見ては、寧ぞ以て其の意に答へざるべけんや」(『全唐文』卷五五三、『韓昌黎集』卷一八)。

○思量 考慮する。忖度する。『太平広記』卷一八九・將帥一「李金才」に「高祖曰、我一夜思量、汝言大有理。今日破家滅身亦由汝、化家爲國亦由汝(高祖曰く、「我一夜思量せり、汝の言大いに理有り。今日家を破り身を滅ぼすも亦た汝に由る、家を化し国と爲すも亦た汝に由る」と)。(出典は唐・胡璩『譚賓録』)。

○倉卒 急なさま。慌ただしいさま。『漢書』卷八六・王嘉伝に「今諸大夫有材能者甚少、宜豫蓄養可成就者、則士赴難不受其死、臨事倉卒乃求、非所以明朝廷也(今の諸大夫材能有る者甚だ少し、宜しく予め蓄養して成就すべき者なれば、則ち士は難に赴きて其の死を受けず、事に臨んで倉卒として乃ち求む、朝廷を明にする所以に非ざるなり)」。『太平広記』にも散見される。卷一〇四・報応三・金剛經「盧氏」に「心甚惡之、倉卒之際、不知是死。又見馬出不由門、皆行牆上、乃驚愕下泣、方知必死(心甚だ之を惡む、倉卒の際、是の死を知らず。又た馬の出づるに門に由らずして、皆牆上を行くを見る)、乃ち驚愕して泣下り、方めて必ず死するを知れり」(出典は唐・戴孚『広異記』)。

○愧汗洽背 冷や汗が背中じゅうに流れる。「愧汗」は冷や汗。『唐書』卷一六九・「韋澳伝」に「澳愧汗不能對、乃罷改京兆尹(澳愧汗して對ふる能はず、乃ち罷めて京兆尹に改めらる)。「洽背」は『漢書』卷四〇・王陵伝に「不知汗出洽背(汗の出でて背を洽らすを知

らず)」とあり、顔師古の注に「洽は濡(濡れる)なり」とある。『太平広記』卷一二三・報応二二・冤報「乾寧宰相」に「乾寧二年、邠州王行瑜會李茂貞、韓建入覲。決謀廢立、帝既睹三帥齊至。必有異謀、乃御樓見之、謂曰、卿等不召而來。欲有何意、茂貞等洽背不能對(乾寧二年、邠州の王行瑜 李茂貞・韓建と会し入覲し、廢立を決謀せんとす。帝既に三帥の齊ひて至るは、必ず異謀有らんと睹て、乃ち御樓より之を見て、謂ひて曰く、「卿等召さずして來たる。何の意か有らんと欲す」と。茂貞等背を洽らして對ふる能はず)」(出典は五代・孫光憲『北夢瑣言』)。

○年德 年齢にふさわしい徳を備えて振る舞いができる人。年齢德行。

○竟誰 いったい誰が……か。

○昏迷 意識がはっきりしない。ぼんやりする。『太平広記』卷一二二・報応二一・冤報「段秀實」に「唐朱泚敗、奔涇州。京師副元帥李晟、收復宮闕。朱泚既敗走、收殘兵士、纔餘一二百人。忽昏迷、不辨南北、因問路於田父(唐の朱泚敗れ、涇州に奔る。京師の副元帥李晟、宮闕を收復す。朱泚既に敗走し、殘兵士を収めんとするに、纔かに一二百人を余すのみ。忽ち昏迷し、南北を弁ぜず、因りて路を田父に問ふ)(出典は唐・闕名『広徳神異録』)」など数例。

○議定 相談協議して決める。『漢書』卷三・高后紀に「今欲差次列侯功以定朝位、臧于高廟、世世勿絶、嗣子各襲其功位。其與列侯議定、奏之丞相(今差して列侯の功を次して以て朝位を定め、高廟に臧し、世世絶ゆること勿からしめ、嗣子は各おの其の功位を襲は

しめんと欲す。其れ列侯と議定し、之を丞相に奏せよ」。

○入對 臣下が皇宮に赴き直接天子の質問や問題に答える。『旧唐書』卷六三・封倫伝に「倫曰、公當弗憂、待皇后至必有恩詔。明日果召素入對、獨孤后勞之曰、公知吾夫妻年老無以娛心、盛飾此宮、豈非孝順（倫曰く、「公当に憂へざるべし、皇后の至るを待てば必ず恩詔有らん」と。明日果して素を召して入對せしむ、獨孤后之を勞ひて曰く、「公吾が夫妻年老いて以て心を娛しましむること無きを知れば、此宮を盛飾す、豈に孝順に非ずや」と）」。

○愕然 驚きいぶかるさま。『太平広記』には、卷二七二・婦人三「張褐妻」に「褐已死、至宅門、僮僕無有識者、但云、江淮郎君。兄弟皆愕然。其嫡母蘇夫人泣而謂諸子（褐已に死す、宅門に至り、僮僕識る者有る無し、但だ云ふ、「江淮郎君なり」と。兄弟皆愕然たり。其の嫡母蘇夫人泣きて諸子に謂ふ）」（出典は五代・孫光憲『北夢瑣言』）などのほか頻見できる。

○工部尚書 尚書省工部に属し、その長官を指す、正三品。

【参考】

○李自良と馬燧

李自良の伝記は『新唐書』卷一五九・列伝八四および『旧唐書』卷一四六・列伝九六に「李自良伝」がある。大略以下の通りである。本話に関連するので、左に見ておく。李自良は兗州泗水の人。安祿山の乱時に兗鄆節度使能元皓に從い転戦する。のち、浙東の薛兼訓に仕えて太原に移る。そこで牙将となっている。時に回紇の侵入に

対して鮑防が総節度事となり、大将の焦伯瑜らに迎撃させる。李自良は献策したが採用されず、焦伯瑜は大敗を喫する。このことにより李自良の名はかえって知れ渡ることになる。馬燧が鮑防に代わる際に軍候となり、馬燧の信任を得る。田悦討伐の際にも軍功があった。貞元三年（七八七）、徳宗は馬燧の軍務を解き、李自良に替えさせようとした。自良は辞退し、右龍武大將軍を授けられる。入朝して天子に拝謁すると、天子は「卿は進退に於いて寧ぞ礼有らざらんや。然れども北門を守るに卿に易はる者無し。勉めて朕の為に行へ」と仰せであった。のち、檢工部尚書により河東節度使を授かった。法により土地を治めて、住民は軍の存在を知らないほどであった。尚書左僕射を追贈されている。

李自良は兵を用いるのに才能があり、軍功も多かった。浙東の薛兼訓や馬燧に重用されてその才能を発揮した。『新唐書』卷一五五・列伝八〇「馬燧伝」によれば、刺史であった鮑防の大敗をうけた太原は兵力が脆弱になっていたところ、廝役を募り数千人を得て、訓練を施し精銳として育てた。魏博の田悦討伐の際には、李自良に騎兵を率いて「双岡」を守らせ、朱滔討伐には李自良に六県を平定させている。したがって、馬燧から李自良への交替は現実に考えられたことである。このとき李自良は「自良燧に事ふること久しきを以て、敢へて当たらず」（『新唐書』）、「徳宗自良を以て燧に代へんと欲するも、自良懇ろに辞し燧に事ふるの久しくして、代はりて軍帥と為るを欲せず」（『旧唐書』）と辞退している。また、『旧唐書』は、「馬燧の功名を立つるは、自良の協輔の力に由るなり」と指摘し、

李自良が馬燧の片腕であったことを伝えている。本話は、その交替に狐の天符の介在を認めているのである。

○「放鷹」と書冊

本話「李自良」が馬燧に仕える以前は、生業を持たぬ無頼として「鷹鳥を好み、常に囊貨を竭くし、鞬こうせつの用と為す」という暮らしをしていた。これはいわば「鷹匠」のような生活をしていったということであろう。その鷹が「天符」を狐から奪うことにより出世の契機となった。このような狐と書物の関係を物語るものの中に、『太平広記』巻一〇四・報応三・金剛経「王宏」がある。短いので全文を引く。

王宏者、少以漁獵爲事。唐天寶中、嘗放鷹逐兔、走入穴、宏隨探之、得金剛般若經一卷。自此遂不獵云。

王宏なる者、少くして漁獵を以て事と為す。唐の天寶中、嘗て鷹を放ち兔を逐ふ、走にげて穴に入り、宏随ひて之を探り、金剛般若經一卷を得たり。此れ自り遂に獵せずと云ふ。（出典は唐・戴孚『広異記』）

この話は仏教的潤色を経て、追う獲物は兔になっているが、穴の中に『金剛般若經』を得ることになる。これにより王宏は再び殺生戒を犯さぬ話となって収束する。狐や兔の巢である「穴中」「塚中」に書冊を得る話として伝わったと考えられる。もう一例挙げておこう。巻四五一・狐五「孫甌生」には、以下のようにある。

道士孫甌生は、鷹を養うのを業としていた。鷹を放つとある岩屋に入っていく。見ると中に狐が数十枚の紙を読んでいる。

老狐が周囲の狐に伝授している様子である。孫甌生が突入してその書を奪い取る。翌日、十数人が金帛を持参して買い取ると言うが、返さなかった。ある人が言った。「君はこれを手に入れたも使うことができない。一本を写して返せば、口訣を授けよう」。孫甌生はその秘法を伝授され、世の術士となった。狐も約束を守った。のち、玄宗がそれを強く求めたが、孫甌生は与えることをしなかった。ついには罪に問われて殺された。（出典は唐・戴孚『広異記』）。

また、巻四五四・狐八「張簡棲」には、次のようにある。

南陽の張簡棲は、唐の貞元末に徐・泗の間で鷹匠をしていた。ある日、獲物を求めて鷹を放ったが得られず、雲中に跡を追った。にわかに夜になり、覚えぬ廢墟の中にいた。すると灯りが見え、塚から灯りが漏れていた。見ると狐が机に向かって書物を読んでいる。その傍らには多くの鼠が茶菓の用意をしており、人のように拱手している。張簡棲が怒鳴り散らすと、狐は驚き、書物を拾うと真つ暗な穴中深くに隠れた。張簡棲は鷹竿で書物を奪うと帰って行った。夜中、家の外で書物を求める声がしたが、外へ出てみても何も見えない。夜になると同じ事が起こり、不思議に思った。張簡棲は町に行き、友人に書物を取り出し、狐の話を語った。友人はそれを手にして「書物を返して詫びてくる」と言い残した。張簡棲がその後を追うと、友人は狐に変わり、馬は獐になり、追いつけなかった。町に戻って友人宅を訪うと友人は外出もせずにはいた。狐がこれを奪い取ったことを

知った。その書物や着ているものはまるで人のようであった。紙墨も人間世界のものであったが、狐の文字で書かれていた。張簡棲は、はじめの数行を覚えていた、以下に示すことにする。

「以下闕文」（出典の記載なし）

鷹が狐を追っていること、狐は穴中に暮らしていること、その中に光が認められて誘われること、狐は独自の字と書を有していること、また狐はその書物に執着していること等が窺われ、本話との共通性を指摘できる。狐が妖術を使うとする考えを補完する伝承であろう。

○「李自良」収録文献

後世の文献で「李自良」を収めるものは少ないが、李劍国『唐五代志怪伝奇叙録（増訂本）』によれば、左の二点が挙げられる。

明・憑虚子『狐媚叢談』卷二「李自良奪狐天符」

明・呉大震『広艶異編』卷三〇「李自良」

（赤井益久）